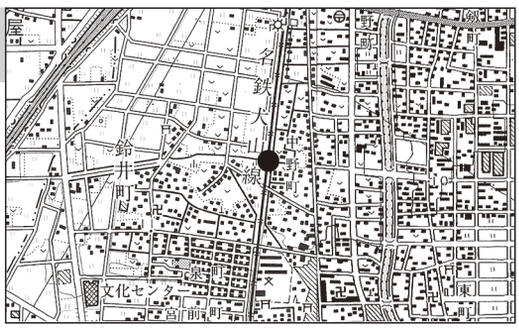
II. 遺跡調査の概要

御山寺（ごさんじ）遺跡

所　在　地　岩倉市中野町
（北緯35度17分18秒 東経136度52分13秒）
調 査 理 由　緊急地方道路整備事業3･3･8号一宮春日井線
調 査 期 間　平成17年４月～９月
調 査 面 積　3,890㎡
担　当　者　石黒立人・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「一宮・小牧」）

調査の経過　発掘調査は、県道一宮春日井線街路新設改良工事の事前調査として、愛知県建設部都市整備課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。平成16年度（調査面積2580㎡）に引き続き２年目の調査である。前年度は名鉄犬山線の東西両隣接地を調査区としたが（04A・B区）、今年度はそこからさらに東西へと調査エリアを拡大した。すなわち線路西側で05A･B区、東側で05C～E区である。

立地と環境　当遺跡は犬山扇状地末端に位置し、04A・05B区ではその礫層が地表面下約20㎝で露出する箇所がある。遺跡および付近の標高は11m前後であるが、これは昭和40年代の区画整理までに微高地の高所を削り低地へ土砂を移動させた結果であり、特に礫層露出部分ではかなりの遺構が滅失していた。

この礫層は、05A区での調査成果および明治時代地籍図の解析から、幅約50m規模の旧河道の東岸にあたることが判明し、礫層を形成した河道はかつて木曽川から分かれていた流路の一つであったことが想定された。ここでは昨年度に引き続き旧河道を「旧五条川」と仮称する。05A区と05B区の間には幅1.8mの用水路が現在も機能しているが、この用水路は上流で現在の五条川から分岐する。そのルートは地籍図から復元される「旧五条川」の東岸からやや高所を南下していることになる。

調査の概要　昨年度と同様に戦国時代の大溝、古墳時代中期と平安時代の竪穴建物で構成される集落が確認された他、線路の東側で埋没した谷地形を２か所で検出した（図１）。以下時代別に概観する。

弥生時代末期　05Ea･Eb区では現地表面から約2.5m下る小さな谷地形を調査区東端と西端でそれぞれ確認した。いずれも南方向に開析するもので、幅も10mに満たない規模である。谷地形の形成時期は不明であるが、平安時代には若干の窪地になっており、該期の集落が展開されるに及んで整地され平坦地化する。西側の谷底からは廻間Ⅰ式期の土器が大量に廃棄状態で出土した。器種は高杯、壺、甕で概ね使用されたものである。一方東側の谷では傾斜面に同じく廃棄状態の土器群が確認された。東側の谷では赤彩された小型壺が出土し、調査中には豊富な湧水も認められたことから、湧水点祭祀が行われた可能性も考えられる。

古墳時代前～中期の集落　線路東側では古墳時代土器の出土は寡少であったが、西側05B区では松河戸様式の土師器を中心とする土器の出土があった。特に松河戸Ⅰ式の土師器甕・高杯が目立つ。竪穴建物は重複状態にある30棟近くが検出されたが、残存状況が良かったのは数棟にすぎない。ほとんどは確認面から深さ５㎝程度で床面に達しており、出土遺物も少なかった。唯一まとまった出土遺物のあったSB1029は重複関係で最古段階と判断され、床面までの深さは約20㎝あった。土器群は覆土中から台付甕、壺、高杯が廃棄状態で出土した。

遺構検出作業中に竪穴建物跡の確認面にて滑石製双孔円板1点が出土した（図２）。そこ

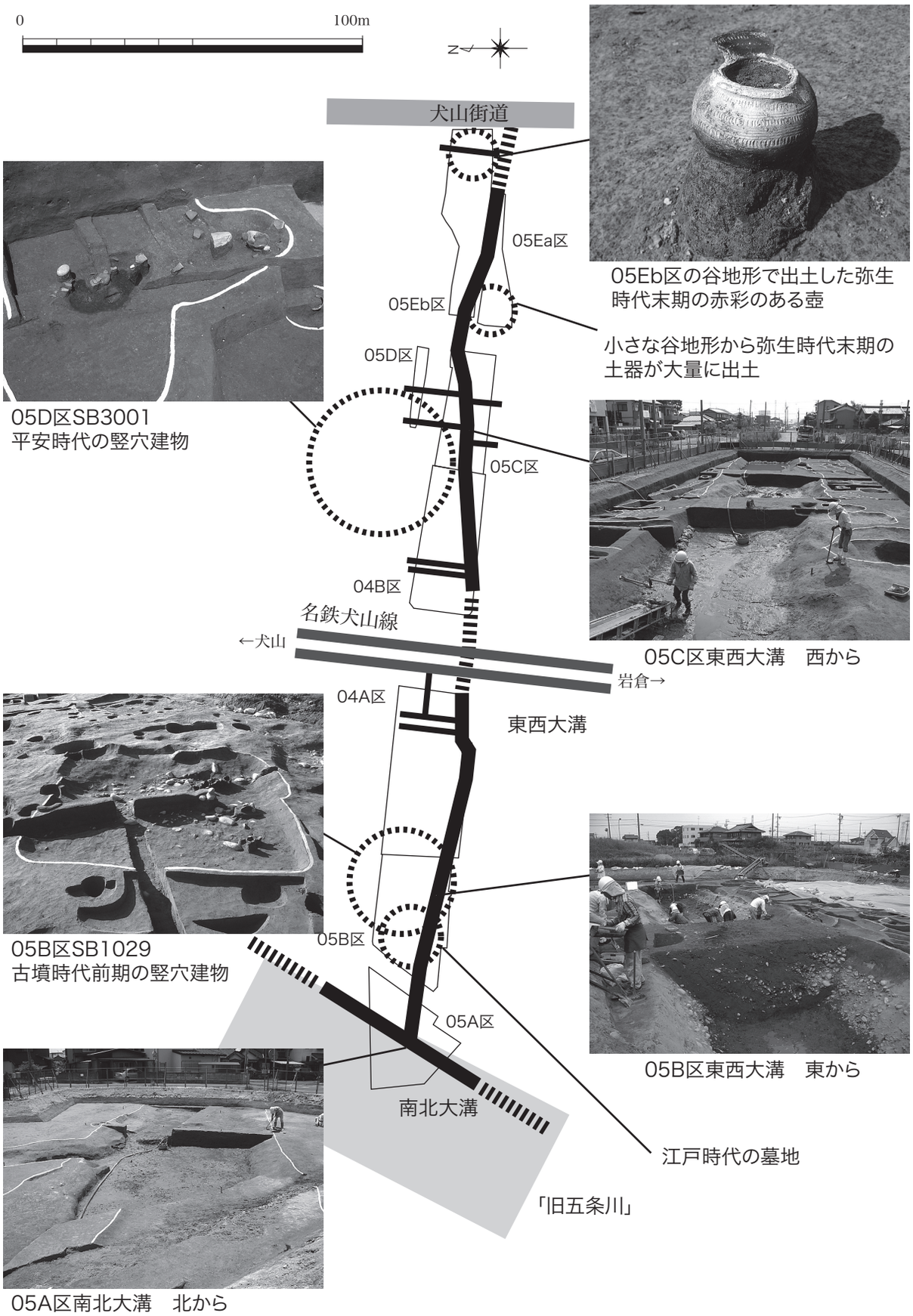

0
100m
N
犬山街道
05Ea区
05Eb区
05D区
05C区
04B区
名鉄犬山線
←犬山
岩倉→
04A区
東西大溝
05B区
05A区
南北大溝
「旧五条川」
江戸時代の墓地
05Eb区の谷地形で出土した弥生時代末期の赤彩のある壺
小さな谷地形から弥生時代末期の土器が大量に出土
05D区SB3001
平安時代の竪穴建物
05C区東西大溝　西から
05B区SB1029
古墳時代前期の竪穴建物
05B区東西大溝　東から
05A区南北大溝　北から

図1　遺跡概略図

で竪穴建物の覆土は全て事務所に持ち帰り、水洗選別作業を実施した。その結果、滑石製の臼玉2点とガラス製臼玉1点が確認された。また検出段階で出土したものに両端に穿孔のある棒状土錘1点がある（図3）。瀬戸内海から紀伊半島沿岸の弥生～古墳時代に展開するタイプで、伊勢湾岸地域では愛知県一宮市大毛池田遺跡や岐阜県可児市など木曽川流域に若干みられる程度である。ただこれ以外の漁労に関わる遺物はなかった。なお、猿投窯初期段階の須恵器は若干数にとどまった。竪穴建物の覆土からは出土せず、05A区などで器台などが出土した。

平安時代の集落

線路東側の05C～E区では、奈良～平安時代の遺物が中世・戦国時代の遺物に混在して多数出土した。しかし確認された古代の遺構は平安時代中期の竪穴建物3棟にとどまった。竪穴建物は、昨年度の調査区（04B区）から東方の05C・D区にあり、05C区東端付近は平安時代でもなお谷地形が窪地状に残っていたとみられること、04B・05D区の北側の畑地でも古代の土器が採集されることから、当該期集落の南端付近を確認したと考えられる。古代でも前半期にあたる7～8世紀の集落遺構については全くといっていいほど確認できなかったが、平安時代集落の形成以前に大規模な整地がなされて大部分が滅失した可能性も考えておきたい。05C区東端付近の谷地形では一部を埋めて整地したとみられる土層があり、そこから古代の須恵器が出土するからである。

竪穴建物は平面形が一辺約3mときわめて小型であるが、造り付けの竈がある。05C区SB2001では北壁に、05D区SB3001では東壁に約40㎝長の煙道のある竈が確認された。特に05D区SB3001の竈は基底部が「袖」として確認され、焚口から煙道の一部が焼けて赤変していた。また焚口底部には土師器甕底部を支える支脚（おそらく石）を据えた直径10㎝の円形穴があった。竈内からは土師器甕1個体分と灰釉陶器が出土した。

遺物で特徴的なのは、包含層中からであるが円面硯、緑釉陶器（器種不明）、墨書土器である。墨書土器は8世紀末～9世紀初頭の須恵器蓋外面に「新」と書かれたもので、地名もしくは人名と考えられる。これら特徴的な遺物は05C区北西部に集中しており、それぞれの所属時期も近いことから、セット関係にあったと考えられる。ただこのセット関係は仏具のそれとは異なり、官衙出土土器のセットに近い。当該期集落の中心的施設がこの付近に存在したと想定しておきたい。

昨年度は平安時代の土錘が一括廃棄された土坑が確認されたが、今年度も包含層中から多数の土錘の出土をみた。また、05C区では包含層中から鉄滓が多数出土したことも特記される。鉄滓はその形状から中世における小鍛冶の可能性が高いが、05C区竪穴建物SB2001の覆土中からも出土しており、平安時代にも行なわれていた可能性も考えておくべきだろう。

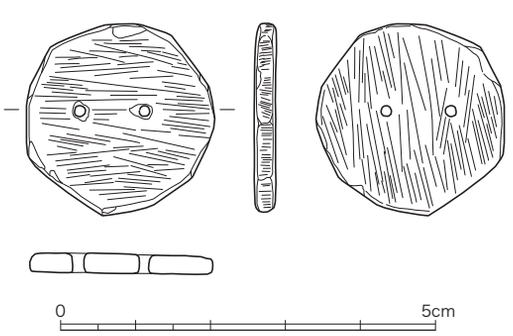


図2　双孔円板実測図（1:1）

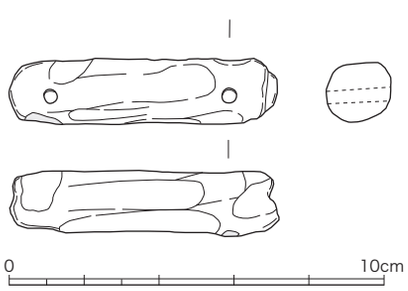


図3　土錘実測図（1:2）

希薄な鎌倉時代

11世紀代の灰釉陶器がみられるものの、12〜13世紀の灰釉系陶器は少なく、鎌倉時代の御山寺遺跡周辺は空閑地もしくは耕作地になっていたと考えられる。ただ遺跡南側を北西方向へのびる道は岩倉と一宮市町屋を結ぶ古い道であったと考えられ、13世紀代は05A区でみられた「旧五条川」の流路も機能していたとみられることから、渡河点としての何らかの施設も想定されよう。しかしながらそれに関わる遺構はなかった。

戦国時代の溝

御山寺遺跡の出土遺物の中でおそらく最大割合を占めると考えられるのが瀬戸美濃編年における古瀬戸後期段階から大窯1期の陶器である。これら陶器は全調査区を通じた包含層中から多数出土するが、大溝からの出土が最も多い。大溝は昨年度確認された途中に屈曲部をもつ概ね東西方向にのびるものの続きで、05A区ではそれが「旧五条川」が湿地化し埋没した後に掘削される南北大溝に合流。したがってここが西端となる。一方東端は未だ不明であるが、犬山街道から東方へのびることは確定的で、全長250m以上の規模になると推定される。ただ、線路から東側では幅約7mであるのに対し、線路から西側では幅約5m以下である点は注意しておきたい。04A区で確認された大溝屈曲部から南方へ大溝が分岐する可能性も考えられ、そうするといくつかの単位で掘削された大溝が結果的に連続した状態で検出されたということもありうる。また05B区では円礫主体の土砂によって意図的に埋め戻した痕跡がうかがえるが、線路東側ではそれが明瞭にはみえない。大溝の掘削から埋没過程については遺物の検討が欠かせず、今後の検討課題としたい。

なお、05C区では大溝に対して南北方向の小溝が数条合流する。これらが検出状況から東西大溝に先行するのはあきらかで、04B区での評価とおりこれらが屋敷地区画溝とするならば、もともとあった屋敷地区画溝を連続させるかたちで大溝が掘削されたことが想定される。その結果大溝は完全な直線にならなかったとも考えられる。ただいずれにせよ大溝開削に何らかの意図があったはずで、その歴史的意義を追求する作業が必要となる。御山寺遺跡は岩倉城と井上城との中間地点に位置し（図4）、これまでの中世〜戦国時代地域史研究からはややはずれた存在であったこともある。大溝出土の遺物は岩倉城が発展期にあった15世紀末〜16世紀前半のものであり、岩倉城下町の範囲にも関わる課題でもあることを示しておきたい。



図4　御山寺遺跡大溝と岩倉城跡の位置関係図
（1:25,000）

江戸時代の墓地

05B区では大溝が埋没した後に形成された墓地が確認した。長軸約1mの楕円形となる土坑は礫層上面まで掘り込まれて、被葬者は棺に入れられな

い状態で埋葬されていた。人骨や歯は9基の土坑から出土したが、風化が進んで形状を保って取り上げられたものはなかった（図5）。出土位置から横臥とされるものが複数あった。また歯だけが残存していた墓はその鑑定から子供とみられる。副葬品のあるものは2基にとどまり、そのうち1基からは寛永通宝6枚を六道銭として埋めたものもあった。他に人骨などの出土がなかあったものの形状から土坑墓と考えられるものが約15ある。また、土坑墓と関わりは不明ながら、長さ約2m幅約15㎝の壁面が焼けて赤変した土坑が3基確認された。土坑覆土からは焼けた骨片が出土しており、火葬施設と推測される。ただ火葬骨を埋葬した墓は確認できなかった。ちなみに05B区では墓石の出土はなく、付近一帯でも当該地点が墓地であった伝承はなかった。（永井邦仁）

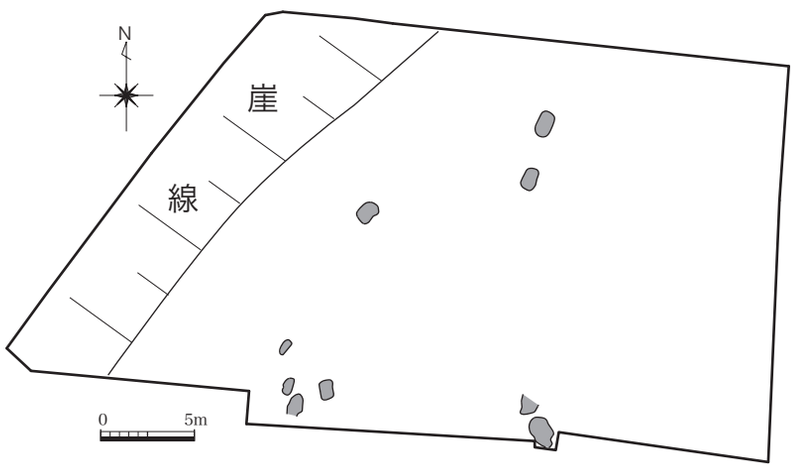
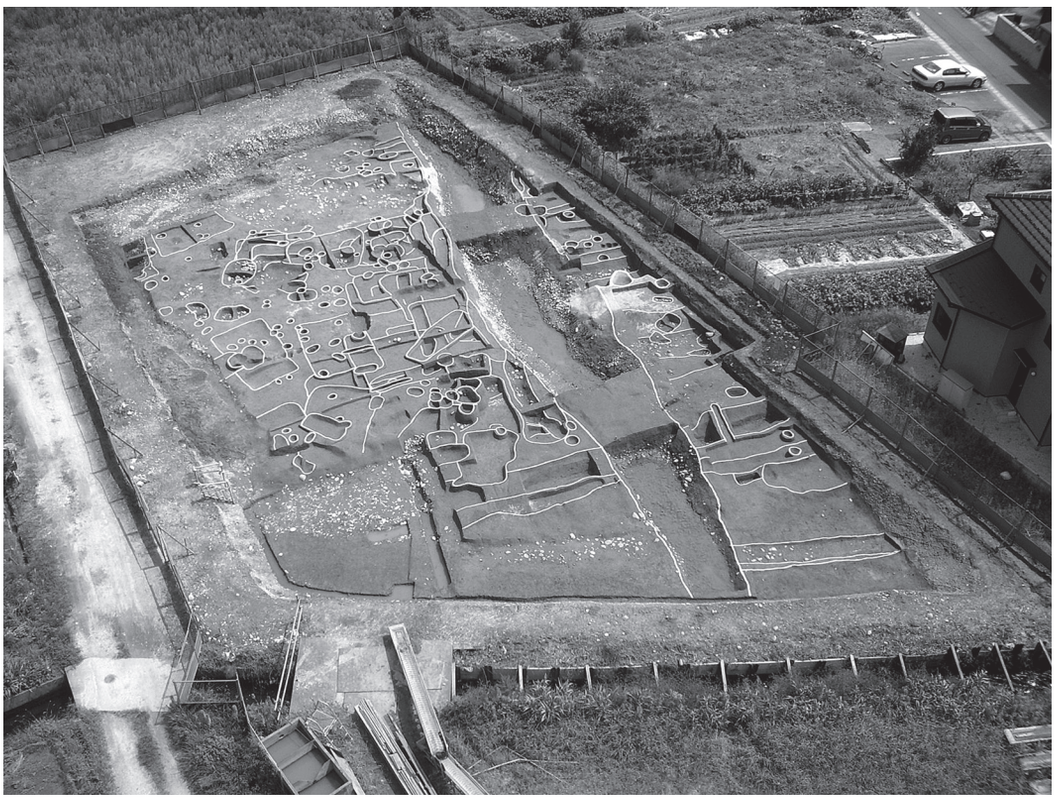


図5　05B区人骨出土墓配置図（1:200）



遺跡全景　西から（手前に05B区、線路東側に05C区、左奥は小牧山）

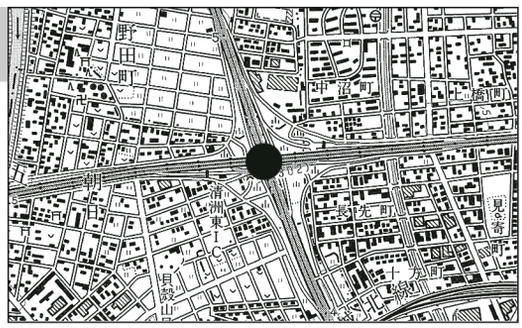


05B区全景　西から



05C区全景　東から

朝日（あさひ）遺跡



調査地点（1/2.5万「清洲」）

所　在　地　清須市ほか
(北緯35度13分18秒 東経136度51分18秒)

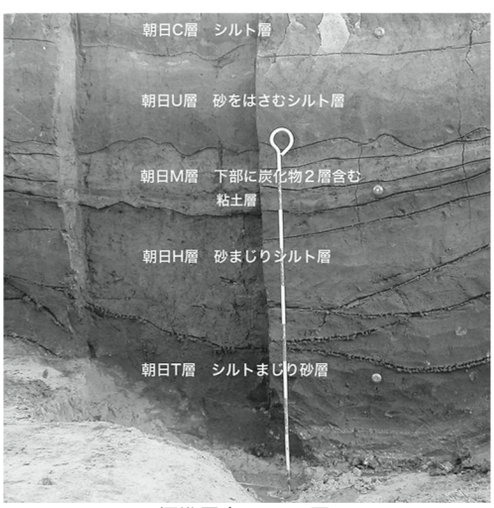
調査理由　名岐道路・近畿自動車道名古屋関線清洲JCT・県道高速清洲一宮線及び県道高速名古屋朝日線

調査期間　平成17年10月～平成18年3月

調査面積　2,995㎡

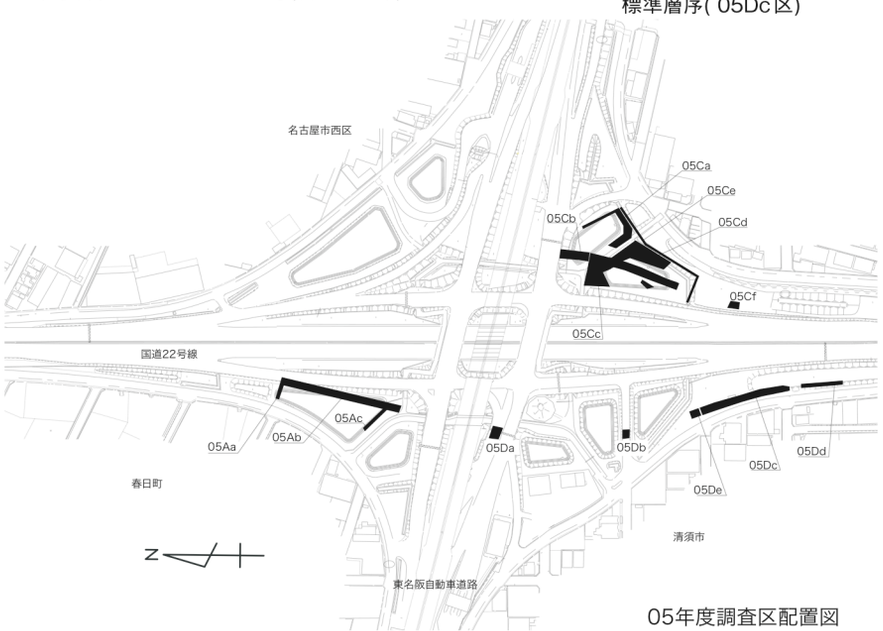
担　当　者　赤塚次郎・永井宏幸・川添和暁

調査の経過　本遺跡は愛知県清須市・西春日井郡春日町・名古屋市西区に広がる、県下最大規模を誇る弥生時代集落である。調査は名岐道路・近畿自動車道名古屋関線清洲JCT・県道高速清洲一宮線及び県道高速名古屋朝日線に伴う事前調査として、国土交通省愛知国道事務所・中日本高速道路株式会社・名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。本年度は、2,995m^{2}を対象として、05Aa区・05Ab区・05Ac区・05Ca区・05Cb区・05Cc区・05Cd区・05Ce区・05Cf区・05Da区・05Db区05Dc区・05Dd区・05De区の14調査区を設定し、調査を行った。



標準層序(05Dc区)

標準層位　朝日遺跡における標準層位については、現場における検討を経て、右図のような基本案を作成し、調査に対応した。上位より朝日C層・朝日U層(砂をはさむシルト層)・朝日M層・朝日H層・朝日T層・朝日B層(基盤層)。また朝日U層と朝日M層との間に不整合面が見られる。現状では、朝日M層が松河戸様式を中心とした古墳時代前期後葉段階、朝日H層を廻間様式を中心とした堆積層と想定している。(赤塚次郎)

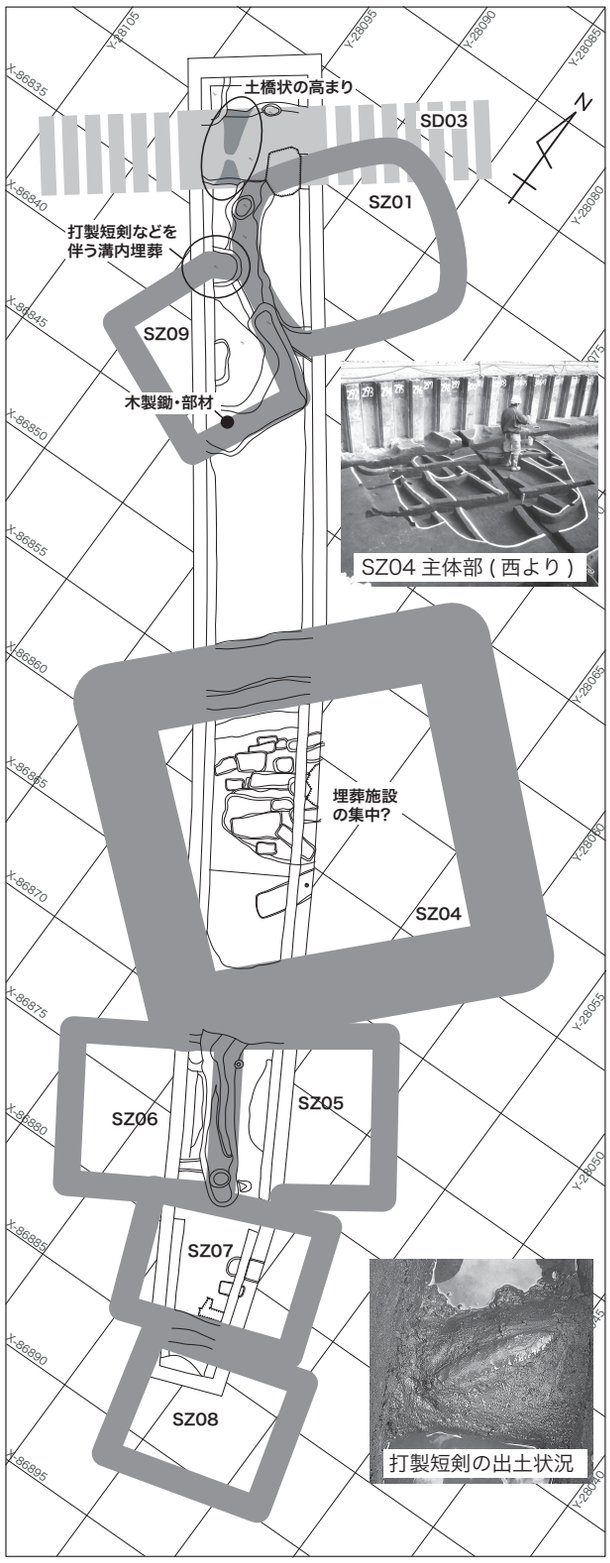


05年度調査区配置図

Ｄｃ区　遺構の時期は中世末期・弥生時代中期後半・弥生時代中期前半以前の大きく３期に分かれる。中世末期では方形土壙が７基検出された。弥生時代中期後半では、東西に延びる溝１条の南側に方形周溝墓が７基が展開しているほか、廃棄土壙や住居跡１軒が検出された。弥生時代中期前半以前では、上記溝１条をはじめ、方形周溝墓の周溝や土坑が見つかっている。

区画溝　調査区北隅に存在する溝SD03を境にして、その南側には方形周溝墓群が展開する。SD03は弥生時代中期前葉に掘削された溝で、朝日遺跡谷C左岸に展開する集落遺跡の南限を区画する溝として考えられている。SD03下層には、掘削時期が朝日式期に遡る溝が存在する。弓片や部材と考えられる木製品(片)などが出土している。SD03は貝田町式新段階に、溝内に土橋状の貼出部が作られている。貼出部の東側には細頸壺をはじめとする土器群とともにイノシシ下顎骨が出土している。

方形周溝墓　方形周溝墓はおおむね高蔵式期を中心にして展開するものであるが、貝田町式新段階に所属する方形周溝墓と一部に重複関係がみられる。特に注目される遺構としては、調査区中央部付近に存在する方形周溝墓SZ04がある。規模的にも比較的大きなものであるが、さらに墳丘上には複数の埋葬施設が重複して存在している。また、SZ09 は北溝にはやや不定形な陸橋部が認められるもので、南側溝内からは部材および鋤?の木製品が並べられた状態で出土している。 周溝内から溝内埋葬と推測できる土壙を検出した。そこからは打製石剣・赤色顔料が付着する摺石・磨製石斧片および粗製有孔鉢が出土している。(川添和暁)



05Dc 区弥生中期後半主要遺構配置図 (1 ：400)



05Cc区SD01(南東より)



05Cc区SD01埋土セクション



05Cc区土器集積(弥生中期後葉)



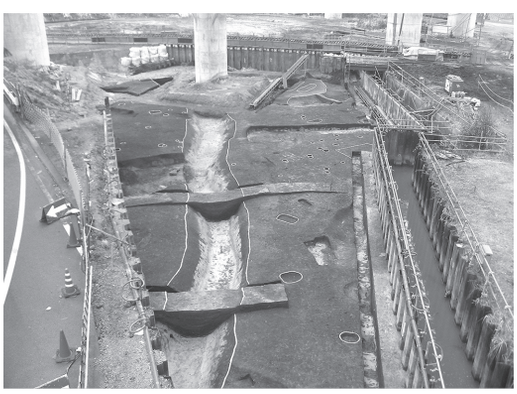
05Cc区SD09内土器棺墓(弥生中期後葉)



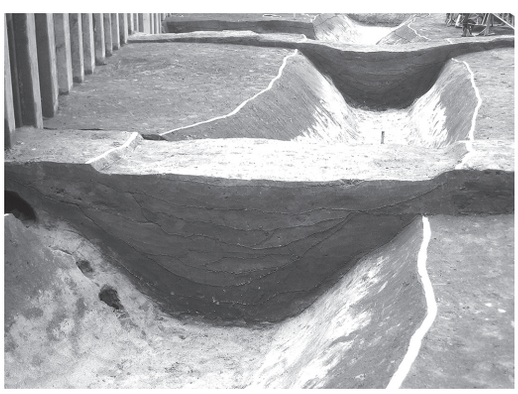
05Cc区弥生中期後葉全景(北より



05Cc区SB25(弥生中期前葉)



05Cd区SD06(南より)



05Cd区SD06埋土セクション



05Cd区SB18(弥生中期後葉)



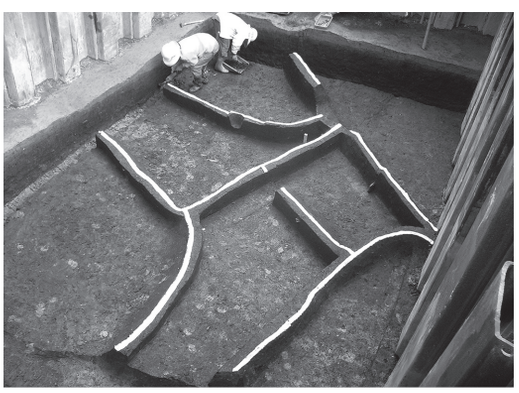
05Cd区SB09(弥生中期後葉)



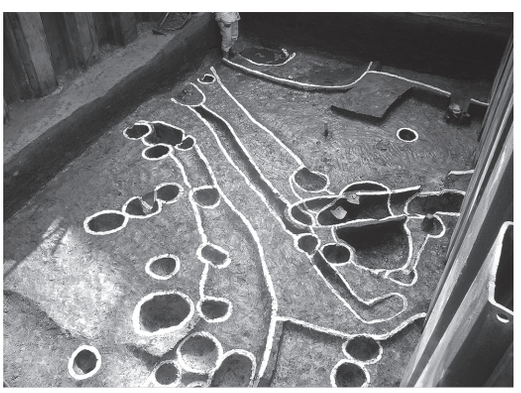
05Cd区SK128(弥生中期後葉)



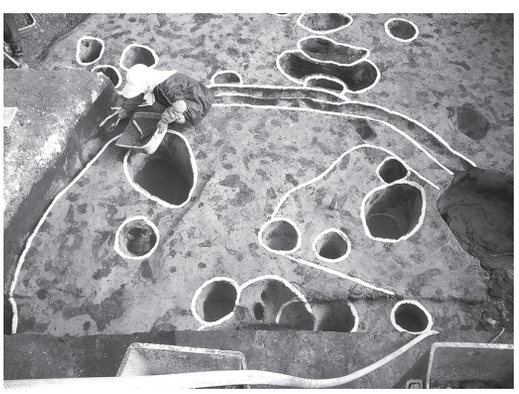
05Cd区弥生中期中葉～後葉全景(北東より)



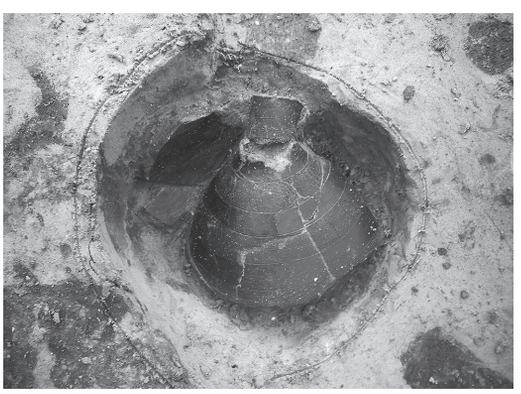
05Db区弥生中期末～後期初頭全景(北西より)



05Db区弥生中期初頭～前葉全景(北西より)



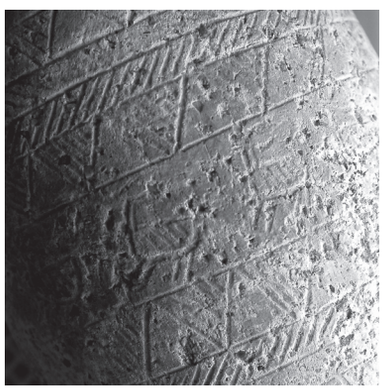
05De区弥生中期後半全景(西より)



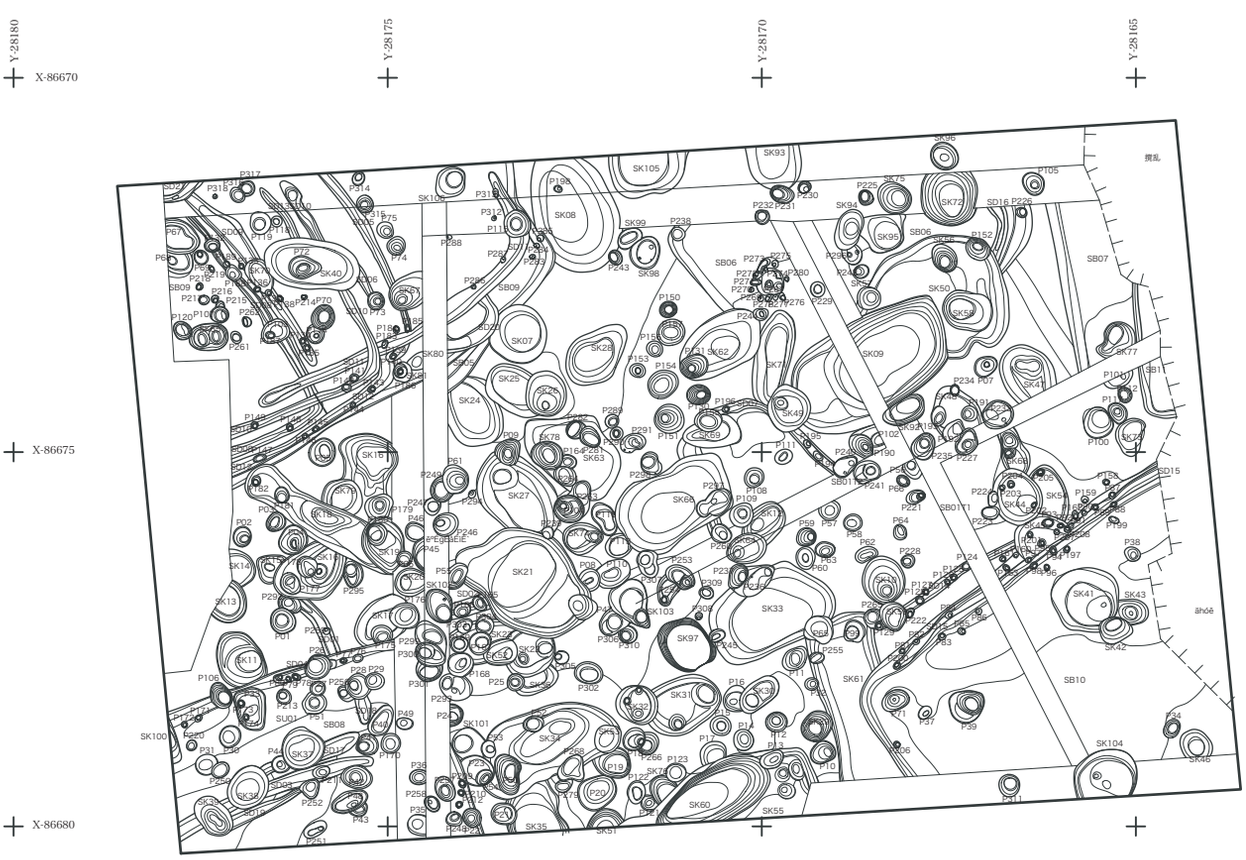
05De区住居内土器埋設遺構(弥生中期中葉)

05Da区　調査地点は、朝日遺跡南集落内の北端部にあたる。朝日Ｈ層が10cm前後不整合面を伴って堆積し、その下部に黒褐色のシルトまじり砂層である朝日Ｔ層が20cmから40cm堆積する。朝日Ｈ層を除去するとおおむね三個所ほどに大きな落ち込みが確認でき、竪穴建物が存在することが想定できた。調査の結果、これらの竪穴建物は山中Ⅱ式期を中心としたものと考えられる。その後、整地層などを除去する過程で、朝日Ｔ層下位付近から新たに複数の竪穴建物を発見した。結果的に調査区北西及び南西・南東隅に竪穴建物が検出でき、その内で南東隅で確認したSB10は、床面に複数の貼床を伴うものであった。掘方は朝日Ｂ層を20cmほど垂直に掘削し、底部の貼床は、建物南東隅で3cm単位の三層構造が見られた。朝日Ｂ層と朝日Ｔ層を撹拌したような、きめ細かな細斑土で丁寧に築固められた状況である。出土した土器などから山中Ⅰ式期に所属するものと思われる。その他の建物や土坑などもおおむね山中式から八王子古宮式期にかけてのものと想定できる。ただ、大型の土坑などからは高蔵式期の土器が出土しており、中期末葉段階の遺構が重複しているものと思われる。なお、05Da区の中央付近に所在する

筒形容器　SK63からは、鹿などの繊細な文様を施した筒形容器がほぼ完全な状況で出土している。(赤塚次郎)



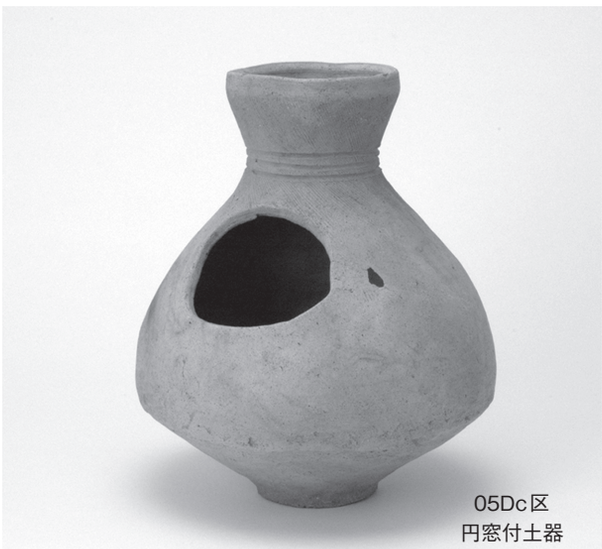
筒形容器の文様



05Da区遺構配置図(１：100)

Cc･Cd区　今年度の調査としては、比較的調査面積の広いCc･Cd区について触れ、まとめとしたい。

05Ｃ区は朝日遺跡南集落の東南端にあたる。後期南集落の外環濠をCc区からCd区へ縦断するように確認した。この外環濠とした溝は、南集落寄りのCc区SD01とSD01の外側に展開するCd区SD06の２条ある。両者は、おそらく虎口状に重複しながら開口部を形成したと思われる。Cc区では、谷Bの縁辺部に沿って高蔵式の土器集積を確認した。本来この堆積層は朝日Ｙ層、つまり山中式を中心とした遺物を含む層位である。おそらく、山中式の時期に掘削した時、大量に出土した高蔵式の遺物群を投棄した結果であろう。調査区ほぼ全域にわたって、貝田町式から高蔵式を中心とした建物群が展開する。壁溝の形から、ほとんどが長方形プランの竪穴建物と考えられる。掘立柱建物もいくつか想定できるが、壁溝のめぐる竪穴建物にくらべ確定しにくい。概ね調査区東寄りには方形周溝墓を中心とした墓域が建物群と接しながら展開する。確認した方形周溝墓のほとんどは高蔵式に比定できる。(永井宏幸)



05Dc区
円窓付土器



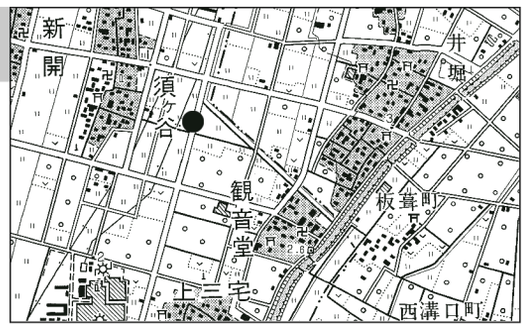
05Da区
筒形容器



05Dc区 SK23出土遺物

須ケ谷（すがたに）遺跡

所　在　地　稲沢市平和町
（北緯35度13分41秒 東経136度45分14秒）
調 査 理 由　県道津島稲沢線道路改築
調 査 期 間　平成17年11～平成18年３月
調 査 面 積　1,341㎡
担　当　者　石黒立人・加藤博紀・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　調査区は現在の県道を挟んで東西に位置している。まず、東側（05Ａ区）から調査を始めた。調査区は北に向かって狭くなるので、北部については土層断面の観察に主眼をおいた。西側（05Ｂ区・05C区）では調査区の幅も広く、面的な調査を進めることができた。

立地と環境　須ヶ谷遺跡は濃尾平野のほぼ中央やや西寄りに位置し、遺跡周辺の現況は水田となっている。しかし、かつては畠が広がる自然堤防地帯であったようだ。北北東には約500mには弥生前期から弥生中期の集落遺跡である野口北出遺跡、北には弥生時代中期後半の集落遺跡である一色青海遺跡がある。南方には古代の三宅廃寺がある。

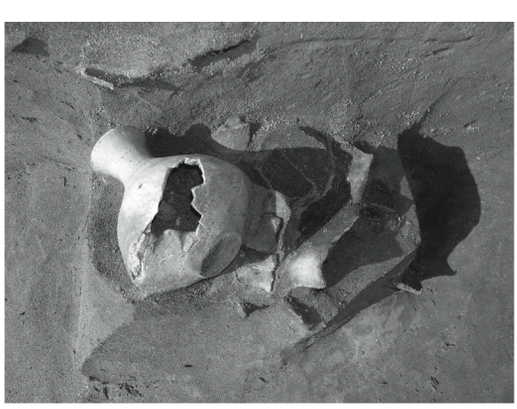
調査の概要　調査区南部は北部に比べて基盤が下降しており、上部から、耕作土、床土、灰色シルト（古代・中世基盤層）、黒色帯、明黄色シルト、暗灰色シルト、黒色シルト（弥生時代地表面および包含層）、青灰色シルトである（基盤）。それに対して北部では床土直下が弥生時代の包含層であり、かなりの削平が窺える。重要なのは黒色帯で、上部と下部の２層に分かれ、とくに弥生中期中葉後半に属す方形周溝墓の周溝埋土上部に明確に堆積しており、遺構判定の重要な指標になった。弥生時代の包含層は、南半部では弥生前期から中期前葉にほぼ限定され、北半部では竪穴建物跡などの濃密な遺構の分布を伴い中期後半までの時期を含み、一色青海遺跡とも並行する可能性がある。このほか、方形周溝墓や竪穴建物跡上部に粗砂が堆積する場合があり、弥生中期中葉後半の一時期に洪水によって浸食・堆積されたことが窺える。

調査は3面に区分して進めた。

第1面は中世以後に属し、流路跡、溝・土坑が検出された。

第2面は弥生時代中期中葉後半以降に属し、方形周溝墓群や竪穴建物跡を検出した。竪穴建物のまわりには外周溝がめぐっていたようであり、調査ではその一部を検出した。方形周溝墓は05Ｂ区南部では墳丘の残りがよく、同時期の他の遺跡の周溝墓とは印象を異


Ｃ区竪穴住居


Ｃ区　周溝墓出土遺物

にする。主体部が検出できたのは１基のみであった。ほかに土坑墓が少数分布するようである。

第3面は弥生前期から弥生中期前半に属し、竪穴建物跡や土坑を検出した。竪穴建物には覆土中に貝層を伴うものがある。

ま と め

須ヶ谷遺跡についてはこれまで情報は無く、今回初めてメスが入った。付近では野口北出遺跡と一色青海遺跡が知られており、両遺跡との関係が問題となる。今回の調査成果によれば、須ヶ谷遺跡は野口北出遺跡に並行しつつ、一色青海遺跡にも年代的に一部重なりをみせるというように、空白期を埋める位置にある。とくに問題になるのが方形周溝墓群であり、野口北出遺跡の方形周溝墓群に後続して形成されている点で、両者が一連のものならば広大な墓域を形成している可能性が浮上するのである。これら遺跡群の関係について詳細は今後の調査によらなければならないが、弥生時代の濃尾平野に新たな核の姿が浮かび上がりつつある予感を感じさせる。(石黒立人)



B･C区　全景



C区　周溝墓



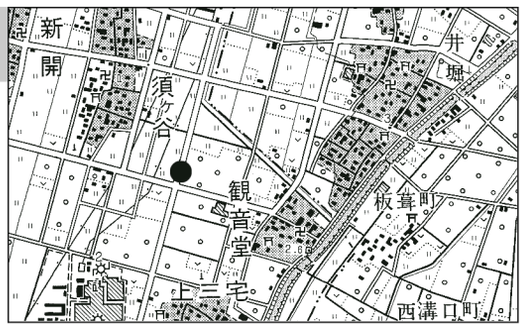
C区　3面北部



C区　3面南部

西海塚遺跡（にしかいづか）

所　在　地　稲沢市平和町
（北緯35度13分36秒 東経136度45分12秒）
調 査 理 由　県道津島稲沢線道路改築
調 査 期 間　平成17年11月～平成18年３月
調 査 面 積　461㎡
担　当　者　石黒立人・加藤博紀・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　本遺跡の発掘調査は、県道津島稲沢線道路改築に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成17年11月から18年３月にかけて須ヶ谷遺跡・山王遺跡とともに実施した。調査面積は461㎡である。

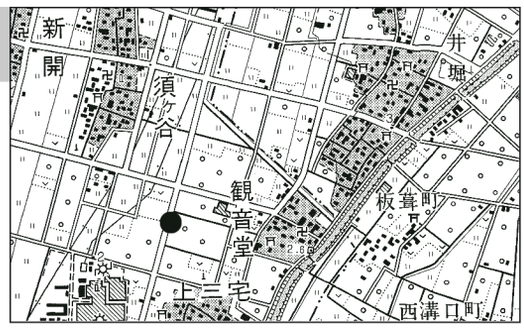
立地と環境　本遺跡は、稲沢市平和町に所在し、三宅川やそれに先行する河道によって形成された微高地上に位置する。近隣には、弥生時代前期の野口・北出遺跡や同時代中期の一色青海遺跡、奈良時代の寺院跡の三宅廃寺などがある。

調査の概要　昭和40年以降に実施された土地区画整理事業によって行われた盛土などの表土を約30㎝除去すると、検出面が現れる。遺跡の南北にある検出面の落込みは、昭和40年以前の水田によると思われる。それは、明治期に作成された地籍図においても確認できる。そして、検出される遺構は、A・B区ともに溝、土坑など多数あるが、遺物はきわめて少ない。これらの遺構は、どれも近世後期から現代までの耕作に伴うものと思われる。また、深堀調査によって、見かけ上、北から南へ河川の縁辺部が次第に移動していく、いわゆる側方付加堆積物の断面が確認された。山王遺跡A区において確認できた自然流路によるものと思われる。（加藤博紀）


北から西海塚遺跡・山王遺跡を望む

山王（さんのう）遺跡

所　在　地　稲沢市平和町
（北緯35度13分30秒 東経136度45分10秒）
調 査 理 由　県道津島稲沢線道路改築
調 査 期 間　平成17年11月～平成18年３月
調 査 面 積　738㎡
担　当　者　石黒立人・加藤博紀・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　本遺跡の発掘調査は、県道津島稲沢線道路改築に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成17年11月から18年３月にかけて須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡とともに実施した。調査面積は738㎡である。

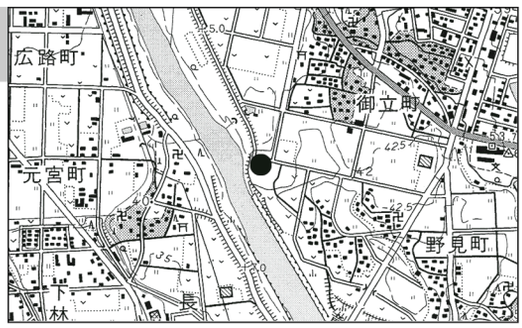
立地と環境　本遺跡は、稲沢市平和町に所在し、三宅川やそれに先行する河道によって形成された微高地上に位置する。近隣には、弥生時代前期の野口・北出遺跡や同時代中期の一色青海遺跡、奈良時代の寺院跡の三宅廃寺などがある。

調査の概要　昭和40年以降に実施された土地区画整理事業によって行われた盛土などの表土を約30㎝除去すると、検出面が現れる。検出される遺構は、一番南に位置するA区に北東方向から南西方向に走る自然流路1条、B区に井戸２基、自然流路と同方向の溝６条以上などがある。自然流路は、三宅川成立以前のもので、自然堆積によって埋められ近世以降においては水田として利用されていた。それは、明治期に作成された地籍図からも読み取ることができる。２基確認できた井戸は、ほぼ掘削できた井戸（SE01）は、曲物などの構造物をもち、遺物は奈良時代から平安時代までの須恵器や灰釉陶器が多い。しかし、13世紀の遺物が若干存在するので、井戸としての掘削時期はその時期だと思われる。もうひとつの井戸（SE02）も、遺物は少ないながらも、堆積状況が似ているので同時期のものと思われる。その他の遺構は、近世後期から現代までの耕作に伴うものと思われる。（加藤博紀）


SE01遺物出土状況　南東から

牛寺（ごでら）遺跡

所　在　地　豊田市御立町11丁目
（北緯35度4分25秒、東経137度10分17秒）
調 査 理 由　矢作川野見地区改修事業
調 査 期 間　平成17年6月～7月
調 査 面 積　1300㎡
担　当　者　小澤一弘・永井宏幸・鵜飼雅弘



調査地点（1/2.5万「豊田南部」）

調査の経過　本遺跡の調査は、矢作川野見地区改修事業に伴う事前調査として、国土交通省豊橋河川事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成17年6月から7月にかけて実施した。調査面積は1300㎡である。

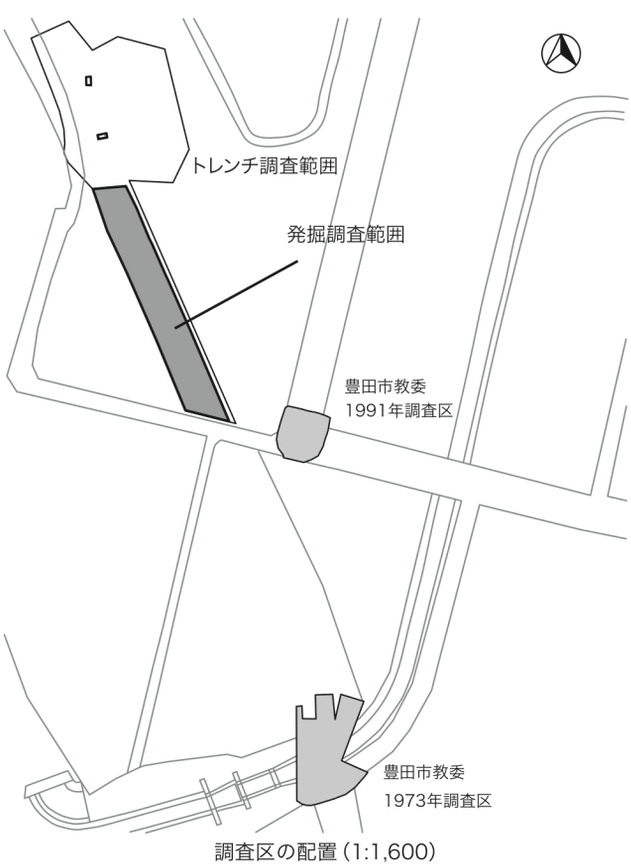
立地と環境　本遺跡は矢作川左岸の段丘低位面上、標高約39mに位置する。遺跡は南に牛寺廃寺、北に古城遺跡が隣接し、同じ段丘上には曽根遺跡、八柱神社古墳、市塚古墳などが所在する。

調査の概要　調査の結果、以下の遺構を確認した。

縄文時代　後世行われた整地の影響を受けており、周溝などを確認する事ができなかったが、竪穴住居に伴う柱穴を1棟分確認した。また土坑SK06aでは土器敷炉を確認した。敷設されていた土器が神明式にあたる事から、縄文中期後半に位置づけられる。またSK06bでは打製石斧が出土している。

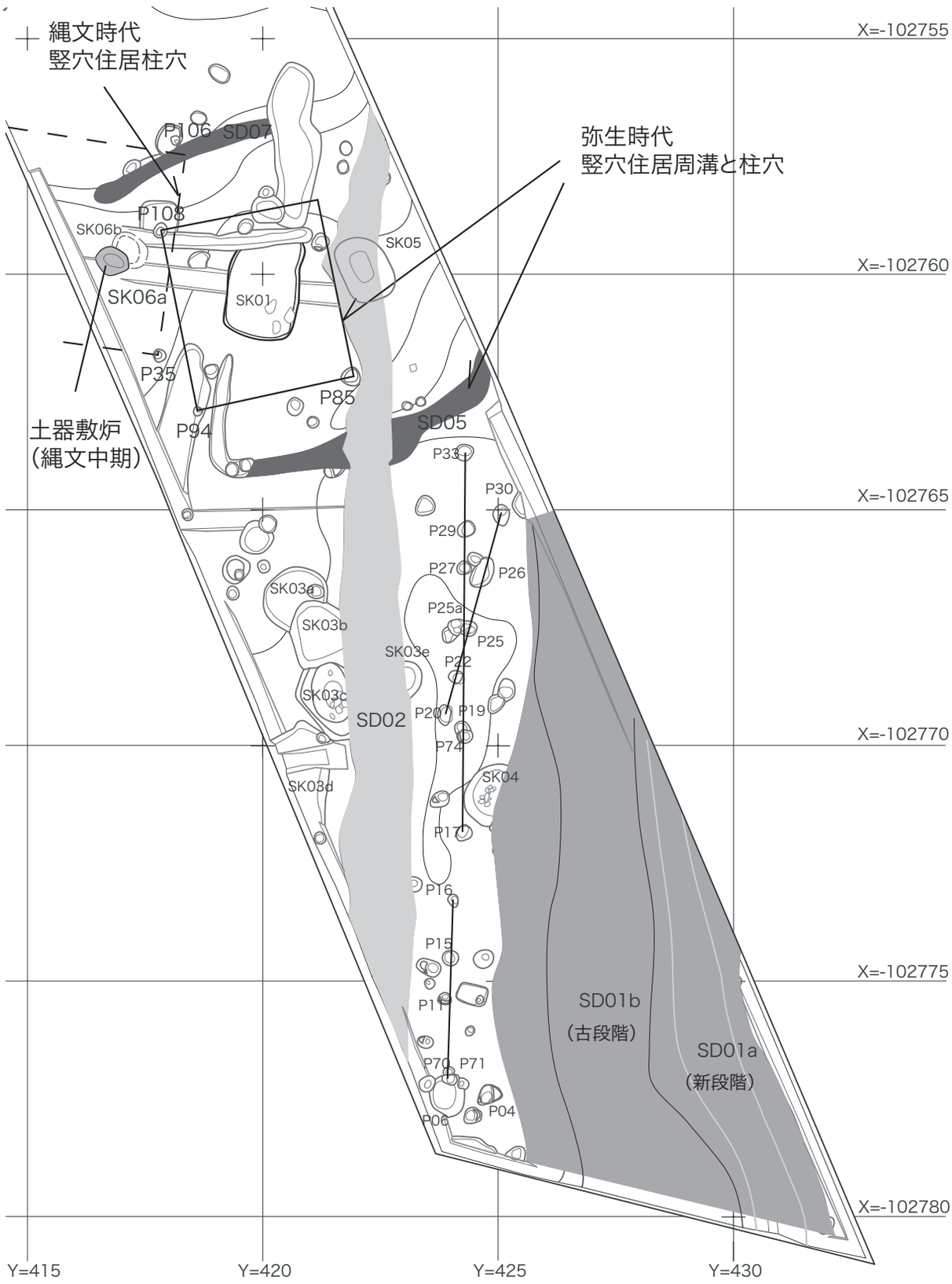
弥生時代　SD05とSD07は竪穴住居の周溝と考えられ、P85、P94、P105はこれに伴う柱穴と考えられる。SD05の付近からは高杯の脚部が出土している。

古代以降　南北に伸びる溝SD01・02を確認した。このうちSD01は幅５～６ｍを測り、古・新の２段階に分かれる。出土遺物から古段階は尾張型山茶碗5形式もしくは6形式、新段階は古瀬戸後期に位置づけられる。またSD01・02に平行するピット列も確認されており、何らかの区画を表していると考えられる。このほかにSK03・04が確認されている。なお調査区の北側は急激に傾斜しており、トレンチ調査を実施したが遺構を確認する事はできなかった。矢作川と賀茂川の合流地点に相当すると考えられる。



調査区の配置（1:1,600）

まとめ　今回の調査の結果縄文中期及び弥生時代の遺構が確認されたことは、この地域における集落の存在を推定する大きな根拠となりうるものである。また調査区のすぐ東では1991年豊田市教育委員会により発掘調査が行われ、今回と同様に12世紀中葉から後葉にかけての溝とピット列が確認されている。北200mに隣接する古城遺跡との関連を含め、今後遺構の検討が必要となろう。（鵜飼雅弘）


縄文時代
竪穴住居柱穴
弥生時代
竪穴住居周溝と柱穴
土器敷炉
(縄文中期)
P106
SD07
P108
SK06b
SK06a
SK01
SK05
P35
P94
P85
SD05
P33
P30
P29
P27
P26
SK03a
P25a
SK03b
P25
SK03e
P22
SK03c
SD02
P20
P19
P74
SK04
SK03d
P17
P16
P15
P11
SD01b
(古段階)
SD01a
(新段階)
P70
P71
P06
P04
X=-102755
X=-102760
X=-102765
X=-102770
X=-102775
X=-102780
Y=415
Y=420
Y=425
Y=430

主要遺構図



調査区全景　南東から



竪穴住居完掘状況



SK06a土器敷炉出土状況



SK06b石斧出土状況



高杯出土状況



SD02石組出土状況



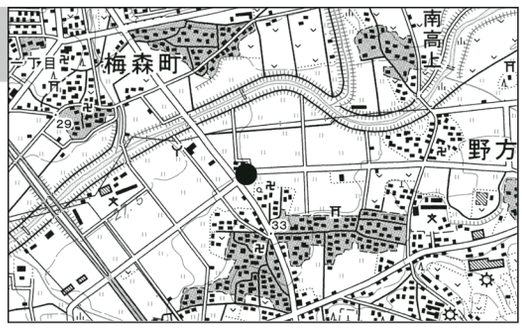
SD01・02完掘状況



SK03石出土状況

三ヶ所（さんがせ）遺跡

所　在　地　日進市浅田町地内
（北緯35度7分47秒 東経137度1分20秒）
調 査 理 由　県道岩崎名古屋線道路改築
調 査 期 間　平成17年８月～９月
調 査 面 積　800㎡
担　当　者　小澤一弘・永井宏幸

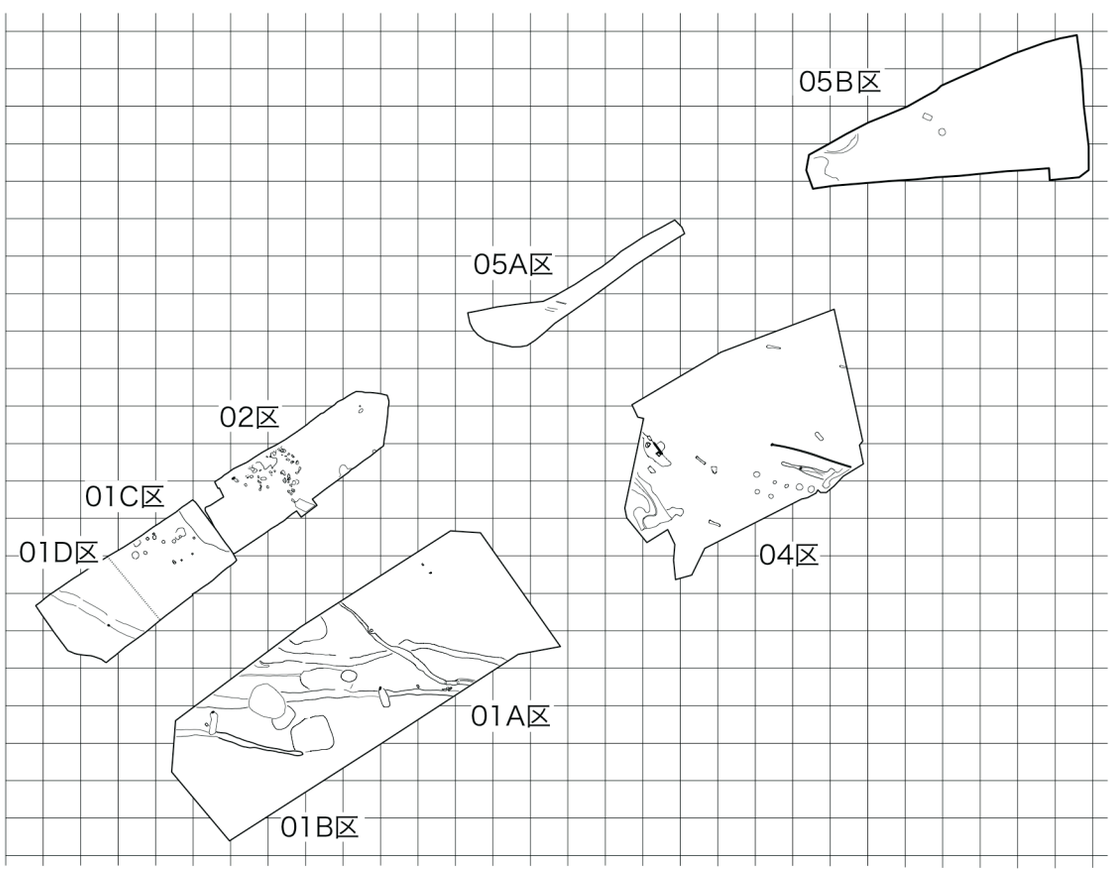


調査地点（1/2.5万「平針」）

調査の経過　調査は、岩崎名古屋線建設の事前調査として、愛知県道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成13年度（1,550㎡）、平成14年度（370㎡）、平成16年度（880㎡）の３次にわたりおこなった。今回は４次調査にあたり、平成17年８月から９月にかけて実施した。調査面積は800㎡である

立地と環境　三ヶ所遺跡は日進市の西部、浅田町地内に所在する。現在の国道153号線バイパス浅田西交差点の北東500mに位置し、天白川左岸域に展開する沖積地に立地する。現地標高は28m前後を測る。隣接する遺跡としては、古代から中世にかけての遺構・遺物を確認した西田面遺跡が500m南西にある。

調査の概要　調査の結果、古代から近世にかけての遺構・遺物が確認された。本年度の調査区は、遺構と遺物が極めて少ないことから、遺跡の北西端と考えられる。



遺構配置図（1：2000）

05A区は、耕地整理前の用水路跡を確認した。調査区内で確認できる範囲では、若干北に振るほぼ東西方向の溝で、おそらく04区水路１および２に繋がる溝であろう。

05B区は、土坑2基と溝1条を検出した。いずれも尾張型第6型式の灰釉系陶器を伴う遺構であった。

ま と め

4年にわたる調査の結果、調査面積が都合3,600㎡に達した。本年度の調査は最終年度にあたるので、調査成果をまとめておきたい。

遺跡の大半は、大きく3時期に分かれる。10世紀代を中心とした遺構・遺物群、12世紀半ばを中心とした遺構・遺物群、そして近世から耕地整理直前の水田関連の水路。現在の三ヶ所交差点がちょうど自然流路にあたり、南東から北西へ、天白川へ向かって流れている。この流路の方向と沿うように遺構が展開する。

04区の西端で確認した溝SD605は古代の流路と想定できる。01AB区の古代溝群は微高地縁辺に位置し、水路あるいは道路遺構に伴う溝の可能性が指摘できる。

中世の遺構は土坑を中心に検出した。土坑の性格を直接示すものはない。

近世以降は、耕地整理前の景観が旧地図から窺える。水田を中心とした地区にあたる。

（永井宏幸）



調査区全景（東から）

桑下東窯跡（くわしたひがし）

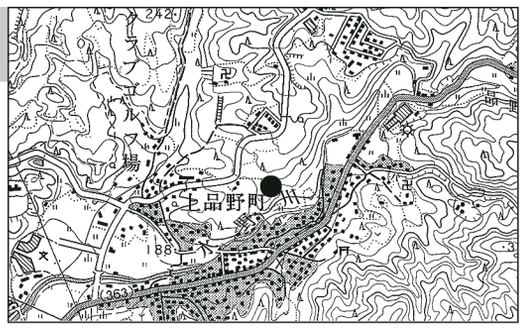
所　在　地　瀬戸市上品野町地内
（北緯35度15分25秒 東経137度8分33秒）

調 査 理 由　国道363号改良

調 査 期 間　平成17年９月～平成18年３月

調 査 面 積　4,726㎡

担　当　者　小澤一弘・鵜飼雅弘



調査地点（1/2.5万「多治見」）

調査の経過　本遺跡の調査は、国道363号の改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成17年9月から平成18年3月にかけて実施した。調査面積は4,726㎡である。

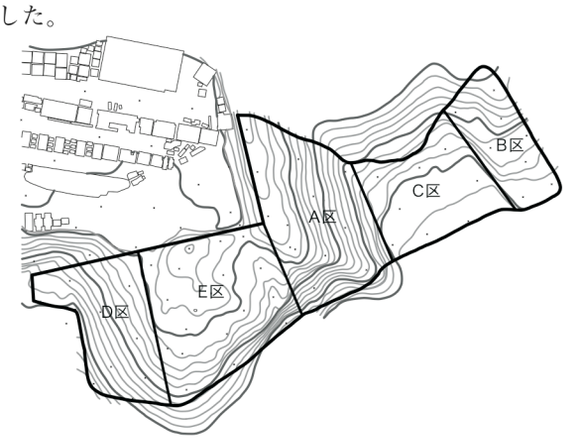
立地と環境　本遺跡は品野盆地の北東、水野川北岸の丘陵上標高220mに立地する。遺跡の西には桑下城跡、東には西金地遺跡が隣接する。また水野川の対岸標高300mの丘陵上には、品野城跡が立地する。

調査の概要　調査区は着手した順番でＡ区からＥ区に区別した。以下、調査により明らかになった成果を、調査区ごとに紹介する。

Ａ　区　調査区東側の平坦面及び高低差を持つ斜面を範囲とする。表土直下で作業場SX01を検出した。SX01は南北13m、東西10mの範囲に及び、南端には南北２群の石敷が見られる。うち北寄りの一群は東側へ傾斜し、周囲からは挟み皿が集中して出土した。石敷の東側は急傾斜となるが灰層状の堆積が見られ、擂鉢・端反皿・匣鉢等が集中して出土した。SX01を拡張するため斜面に盛土を施し、更に盛土の平坦部を維持するために石敷を敷設したと考えられる。

石敷周辺では精製された粘土の散布がみられたため、更に掘削して遺構を確認したところ、ロクロピット40基を検出した。ロクロピットは大別すると、A）平面形態が円形で、粘土が充填されたもの、B）平面形態が円形で、拳よりやや小さい石で軸周りを固めたもの、C）土坑状の楕円形の平面形態で、埋土が地山と同じ茶褐色、中程から粘土混じりの土で軸周りを固めたもの、に分類可能である。これらロクロピットの間には相互に切り合いを持つものもみられ、石組井戸のように石を周りに巡らせたもの、焼台に穴をあけたもの等もみられた。このほか方形の土坑が確認された。SX01より北では遺構は確認されていないが、表土直下から狛犬の胴部が1個体出土した。

Ｂ　区　Ｂ区　調査区の東端にあたり、西金地遺跡に隣接する。斜面を南向きに削り、平坦面を４段つくる。このうち最上段および２段目の平坦面では集石を検出し、下部から土壙墓が検出された。また最上段の土坑墓の周囲では排水溝SD24を確認した。出土遺物は大窯の年代観を示すことから、窯とほぼ同時期の構築が考えられる。２段目にある方形の土坑墓



調査区の配置

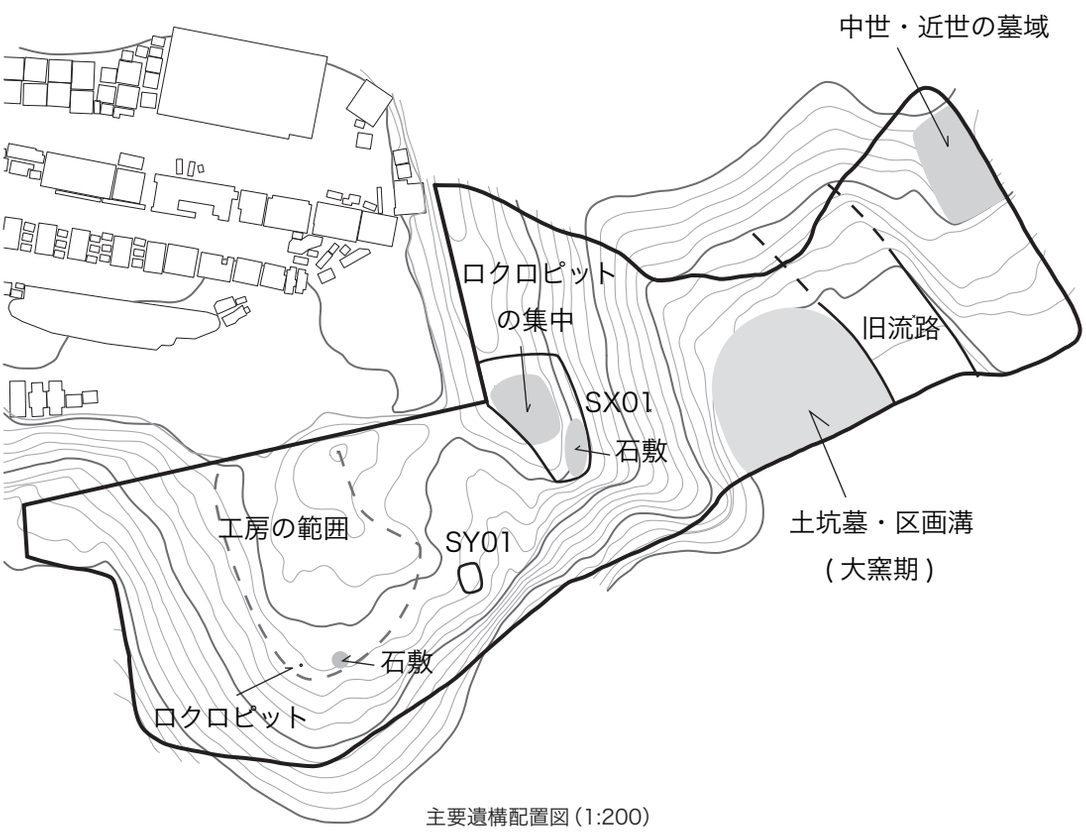
SK12は、出土遺物から17世紀半ばの構築と考えられる。SK12の西４mでは石囲いの溜井戸SE01を検出し。遺構からは近世の徳利、柳茶碗等が出土した。残る下の２段は、後世の耕地造成の影響を受けていたものの、竪穴状の遺構SK02を確認した。SK02は半分以上を削られているものの、壁面は強く被熱している。遺物は擂鉢が出土しているが、あるいは小窯に類するものの可能性がある。

C　　区　A区とB区にはさまれた、谷間の調査区である。谷の東寄りは自然流路と化しているものの、調査区西寄りでは多数の柱穴・土坑・区画溝を確認した。このうち土坑SK21からは、炭化物を多く含む埋土と拳大の石が出土した。形態から火葬墓と考えられる。また柱穴の中には打ち込み柱が多く見られ、P105では柱とともに礎板が出土している。出土遺物は大窯の年代観を持つものが多く、完品が比較的多い事も特徴である。このほか漆椀・箸・木製の鍬・銅製金具などが出土している。谷の埋没後は水田として利用されていたが、出土遺物からは近世中期以降の開墾が想定される。

D　　区　調査区の西端、西に傾斜する斜面及び谷の部分である。その西に桑下城跡が隣接する。明確な遺構は確認できなかったが、谷に堆積する赤色土から手水鉢が1個体出土した。その下層の白色粘土層からは匣鉢片が出土したが、崩落の危険が予想されたため、トレンチよる確認に留めた。

E　　区　窯体SY01およびその西に展開する平坦部をさす。SY01は窯体の床面及び壁面の一部が残存しているものの、窯体右側は既に流失していた。中軸線はほぼ南北方向、残存長は約2.4m、燃焼室の幅は約2m、焼成室床面の傾斜は約26°である。燃焼室には小分焔柱が、焼成室には分焔柱および支柱の痕跡がある。

SY01の西側では作業場が確認された。作業場は調査区の大半で連続して展開しており、



主要遺構配置図（1:200）

斜面では基盤岩を掘削し平坦面を確保している。また末端部では粘土が混じった土を貼り、補強している。このうちSX02は方形のプランを持ち、壁際に排水溝を施す。またSX03の南端ではロクロピット及び方形の土坑が確認された。丘陵の頂部には掘立柱建物SB01が検出された。(鵜飼雅弘)

ま と め　桑下東窯跡の調査では新たな発見が相次いだ。第１はA区のロクロピット群である。約50㎡の範囲から63基を検出した。またE区でも３基を検出した。第２には丘陵全体に土木事業が施され、窯体の周辺には石敷、竪穴状作業場、住居跡もしくは作業施設、縁辺部には盛り土がみられ、大規模な作業空間を造成していた事である。第３にはC区の谷の柱穴群とB区の土壙墓である。今まで見過ごされていた谷部より遺構を検出した事により、今後の窯跡の調査に一石を投じる事となった。出土遺物の大半は匣鉢と挟み皿の窯道具である。製品としては天目茶碗、灰釉丸碗、端反皿、擂鉢が多くみられるが、狛犬、魚型掛け花生、燭台なども出土している。(小澤一弘)



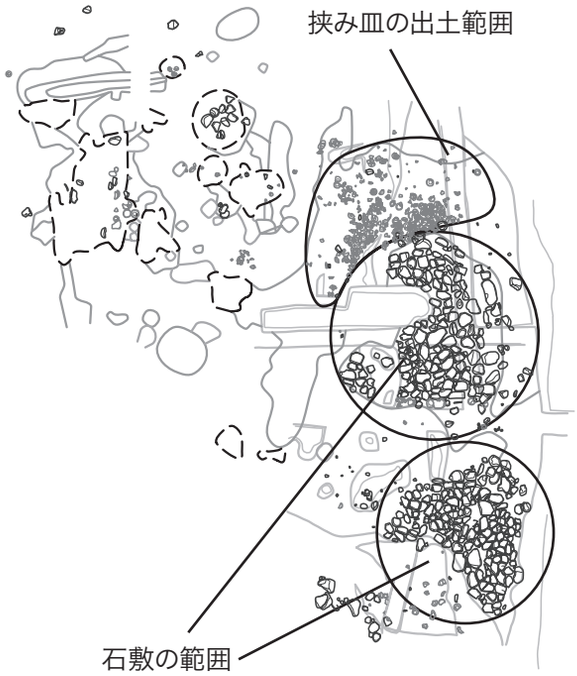
A区ロクロピット



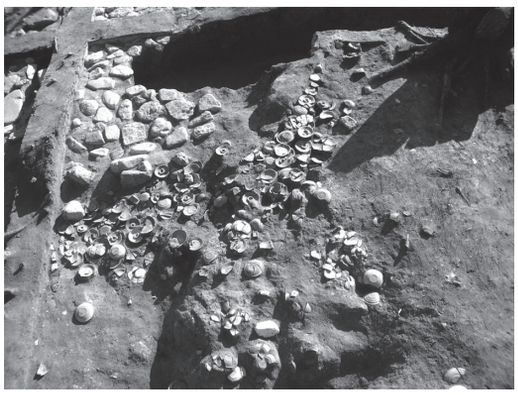
A区出土狛犬



A区石敷検出状況



SX01石敷・挟み皿の分布（1:150）



SX01 挟み皿



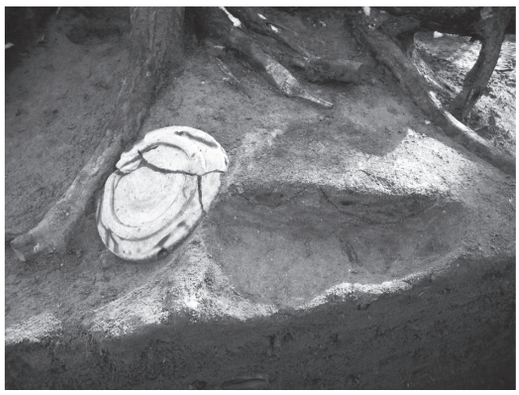
SK09 完掘状況



B区 SK02出土状況



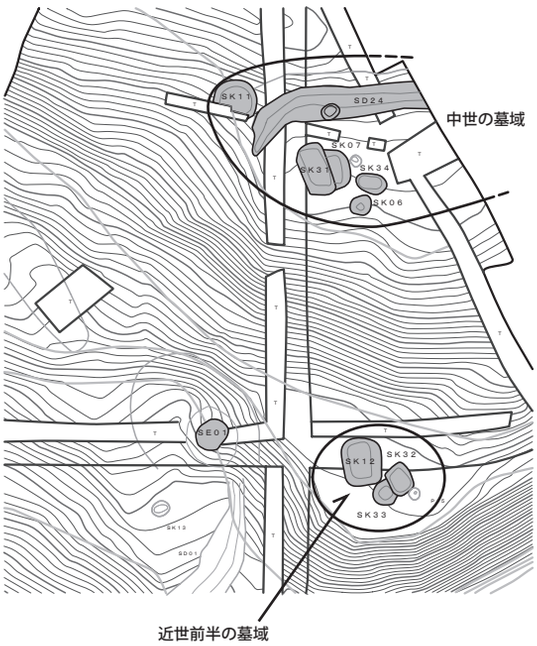
C区 SK21出土状況



D区 手水鉢出土状況



C区 礎板



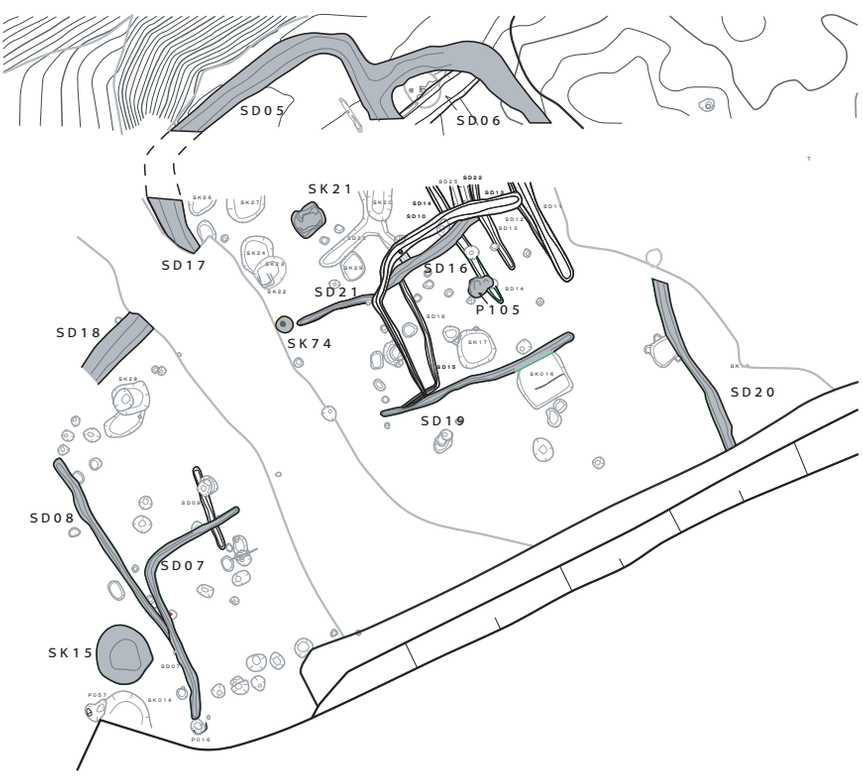
B区の主な遺構 (1:200)



B区土坑墓半裁状況



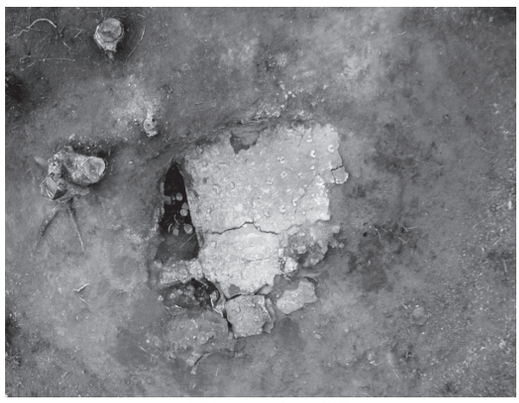
B区 SE01



C区の主な遺構 (1:200)



SY01窯体部分 (1:40)



E区SY01 検出状況



E区 SB01



E区 作業場出土状況

大坪西遺跡（おおつぼにし）

所　在　地　瀬戸市大坪町
（北緯35度11分39秒 東経137度6分12秒）
調 査 理 由　国道248号線建設
調 査 期 間　平成17年11月～12月
調 査 面 積　380㎡
担　当　者　小澤一弘・樋上　昇



調査地点（1/2.5万「瀬戸」）

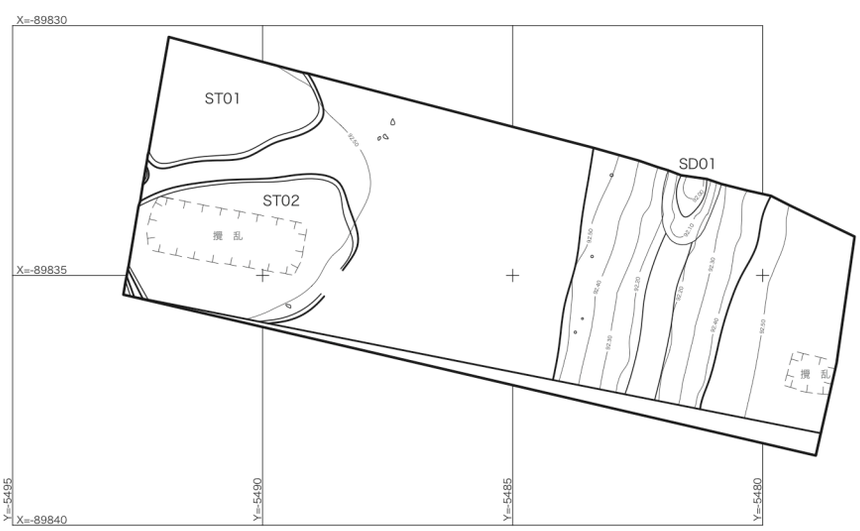
調査の経過　本遺跡の発掘調査は、国道248号線の建設にともなう事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成17年11月から12月にかけて実施した。調査面積は380㎡である。

立地と環境　大坪西遺跡は瀬戸市南部に位置し、東から西に流れる山口川（矢田川）によって形成された沖積地と、遺跡の南東に聳える猿投山から派生する丘陵部との境に立地している。標高は約92mである。

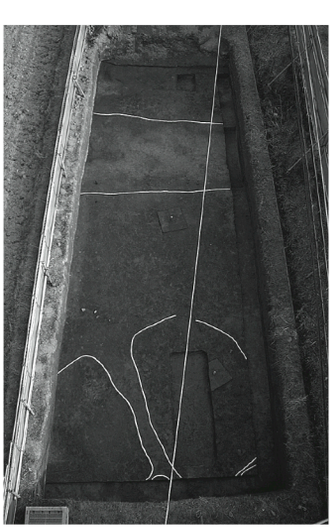
調査の概要　すでに平成12・13年度に、今年度調査区の西側で発掘調査が行われており、縄文後期に属する、南から北に流れる自然流路1条と土器集積遺構4基・土坑2基と、古墳前期の水田跡が確認されている。今回の調査区では、縄文後期中葉の竪穴住居3棟と溝3条、土坑20基、ピット66基および古墳前期の水田区画2筆を検出した。

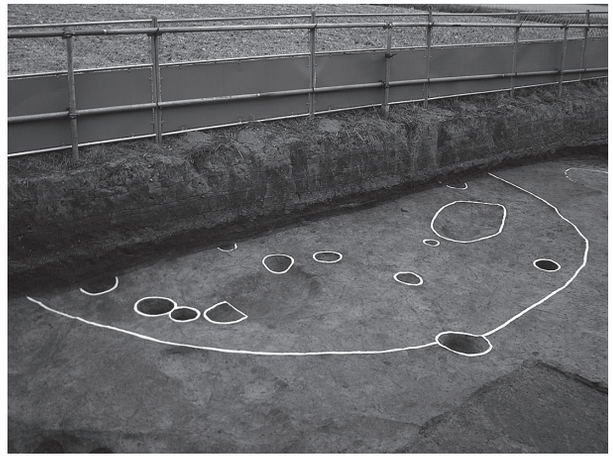
縄文後期の遺構群では、調査区西寄りで直径約6mの円形住居SB01および、その東に竪穴住居の掘り込み面は失われているが、円形にめぐる柱穴列が確認できたSB02・03がある。さらにSB01の付近には、土坑SK01～12のほか、平面がL字形に曲がる溝SD02がある。うちSB01、SK08～10・12からは、磨製石斧や石鏃のほか、200点近い石器の剥片が出土している。なお、調査区の東端付近では、昭和40年頃に削平された、南からのびる尾根筋を確認し、この尾根筋が遺跡の東限にあたることが判明した。

古墳前期の水田跡は、調査区の西端で南北に並ぶ2筆（ST01・02）を検出するにとどまり、これ以上東には水田域が広がらないことを確認した。さらに水田区画の東には南北溝SD01がある。遺物は縄文後期と古墳前期の土器を含むが、水田区画とは方位が異なることや、水田耕作土と同一層である黒色粘土層を切って掘削されていることから、水田区画よりも新しく、さらにこの溝が洪水によって埋没したのちに形成された土層から山茶椀が出土しているため、中世より以前に機能していたと考えられる。（樋上　昇）



上面遺構（古墳前期水田区画　1:150）


上面遺構全景



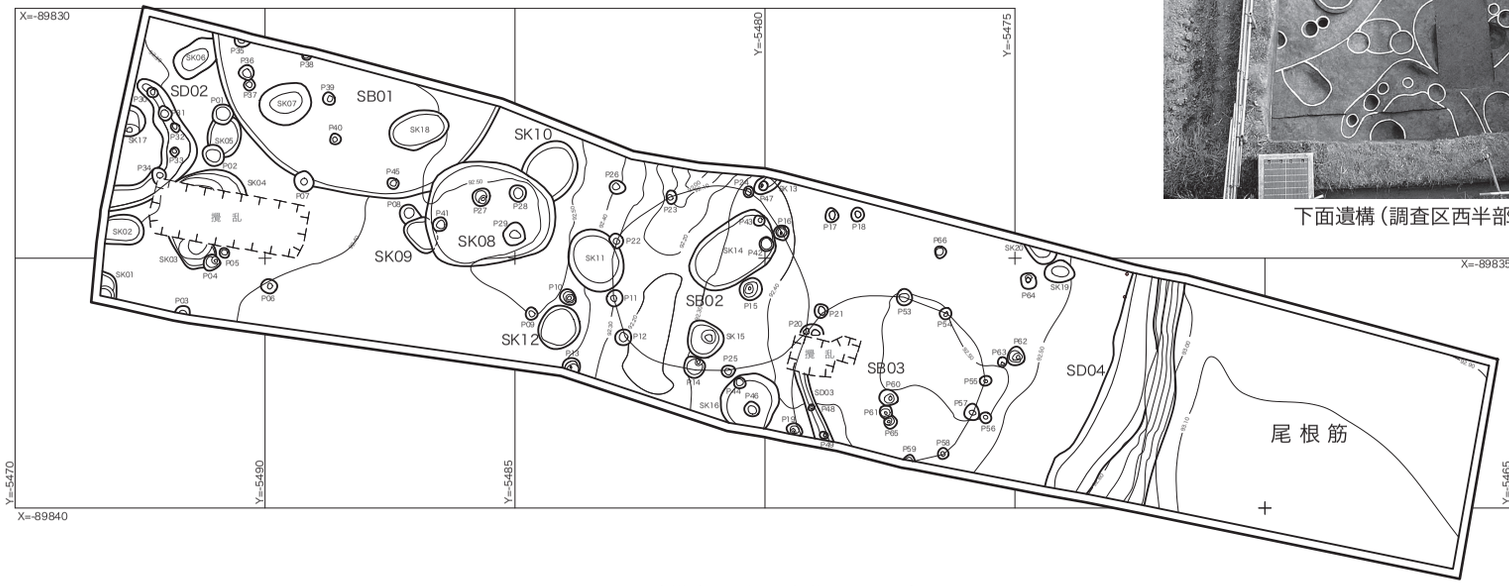
SB01全景



SK08石器出土状況



下面遺構（調査区西半部）



下面遺構（縄文後期中葉　1:150）

鎌倉街道周辺遺跡（かまくらかいどうしゅうへん）

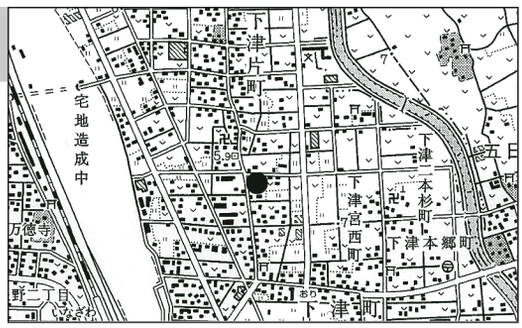
所　在　地　稲沢市下津新町
（北緯35度15分27秒 東経136度49分33秒）

調 査 理 由　道路改良事業(都市再開発関連)主要地方道路名古屋豊山稲沢線

調 査 期 間　平成17年４月～11月

調 査 面 積　2,278㎡

担　当　者　宮腰健司・鈴木正貴・加藤博紀



調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　調査は愛知県建設部道路建設課による県道名古屋豊山稲沢線の改良工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成17年４月から11月にかけて実施された。調査区を旧岐阜街道などが存在するためA区～C区の３つに分けて行った。

立地と環境　鎌倉街道周辺遺跡は稲沢市赤池東山町から下津下町までの青木川右岸に位置する広大な遺跡である。尾張平野を流れる三宅川や青木川などによって形成された自然堤防および後背湿地上に立地し、現地表面の標高は約６mを測る。遺跡中央部の現在下津小学校付近には15世紀代に尾張守護所があったと伝えられる下津城跡があり、また西方２～３㎞には古代の尾張国府跡があったと推定されている。今回の調査区は、遺跡の西端部中央に位置しており、稲沢市下津新町に所在する。

調査の概要　今回の調査では、古墳時代から江戸時代までの遺構や遺物が確認された。遺構は古墳時代、古墳時代末～平安時代（古代）、鎌倉・室町時代、江戸時代後半に大別できる。調査は繰り返し積み重なった河川堆積物を検討することによって４面の遺構検出面を把握して進めたが、検出が難しい遺構もあり必ずしも遺構の時期と遺構検出面は対応していない。C区の西側に現宮田用水が流れているが、明治17年作成地籍図によれば青木川から分流する旧河川が用水の位置に流れていたと推測され、調査地点はその旧河川によって形成された自然堤防上に立地すると考えられる。B区南東端部から東側は水田が広がる後背湿地状となっており、遺構の密度は急激に希薄となっている。

古墳時代前期　A区では現地表下約2.2mの黒灰色粘土層上面で浅い落ち込み状の土坑が数基確認された。このうち土坑SX07ではS字状口縁台付甕が埋設されていた。

古墳時代末～平安時代　この時期の遺構には竪穴建物跡約50棟、掘立柱建物跡３棟、溝、土坑などがあり、本遺跡の中心をなす段階と考えられる。竪穴建物跡は全ての調査区で確認され、平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈する。カマドの痕跡を持つものが数基存在するが、残存状況は不良で破壊されていた。A区中央部ではわずかに地形が落ち込んでおり、竪穴建物跡は少ない。その代わりに第４面の遺構として２間×３間の総柱の掘立柱建物跡が２棟確認された。時期を確定することは難しいが、掘立柱建物跡の方位に平行する溝SD43から出土した遺物などから見て、おそらく奈良時代に属するものと思われる。また、B区中央部では９世紀以降の２間×３間の掘立柱建物跡が１棟発見されている。

出土遺物は須恵器杯類や土師器甕が多く、これまでのところ硯など官衙関連遺跡で見られるような特異な遺物は存在しない。これらの状況から、律令体制下における新規開発に伴う竪穴建物跡を主体とした集落と位置づけられ、その一角に掘立柱建物跡の倉庫が設けられたものと推定される。

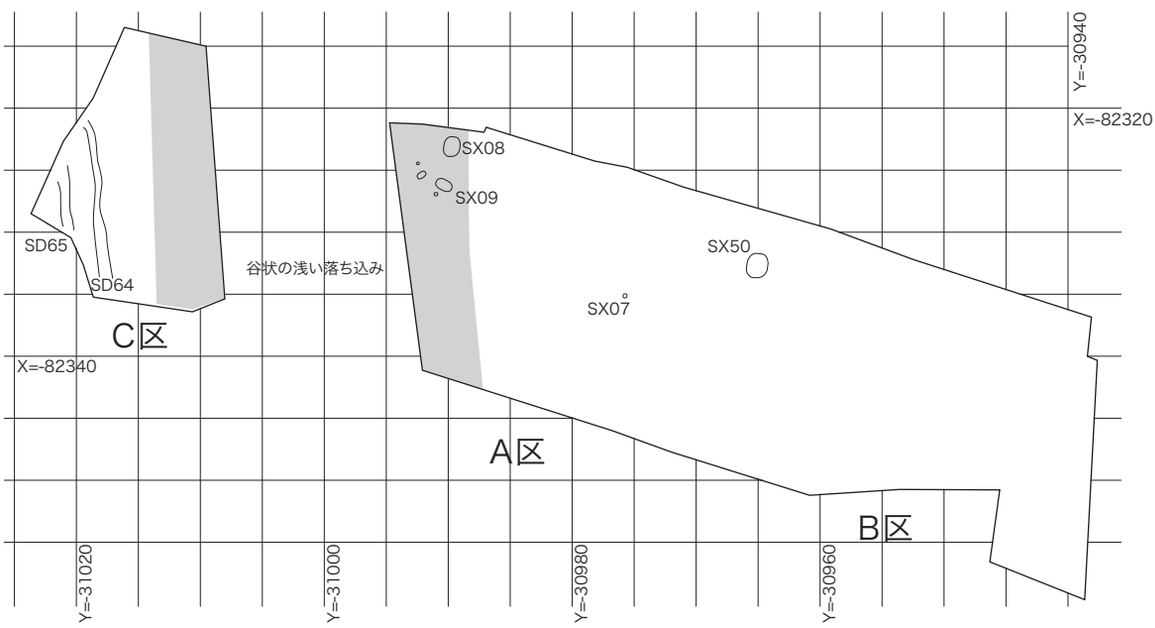


図１　古墳時代前期の主要遺構配置図（1:600）

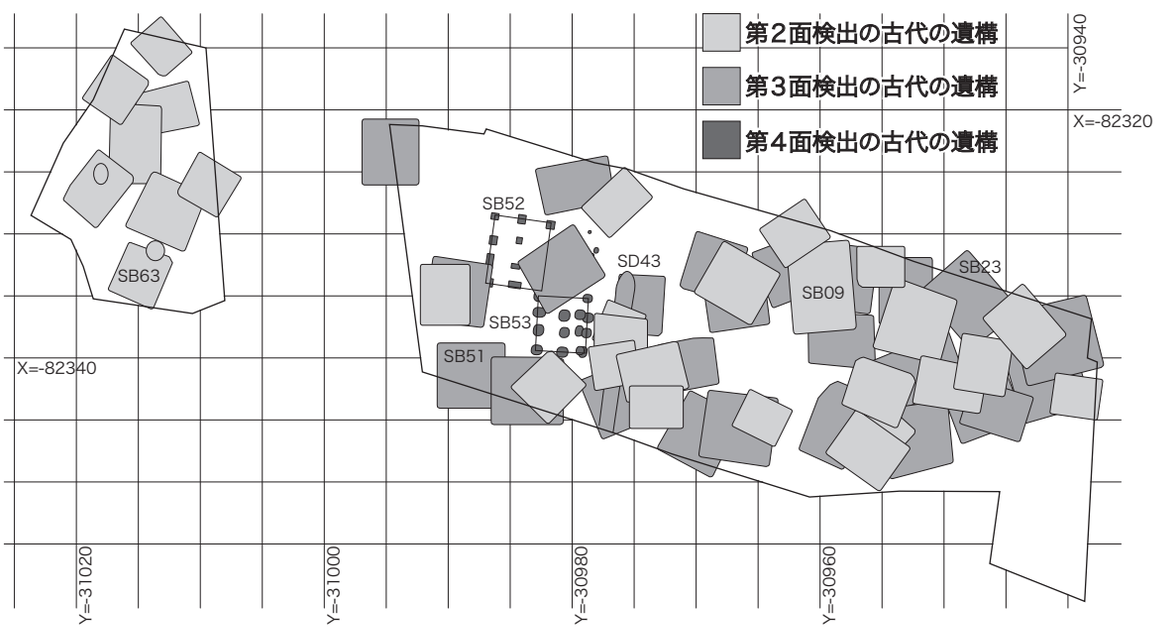


図２　古墳時代末～平安時代の主要遺構配置図（1:600）

鎌　倉・室町時代

平安時代末期から鎌倉時代では、幅が1～4mの溝で囲まれた屋敷地が確認された。区画溝SD11などからは藤澤編年第4～5型式の尾張型山茶椀等が出土した。B区では井戸SK14が発見されたが、井戸側構造物は残存していなかった。

室町時代では、溝2条とそれに平行する形で掘立柱建物跡が2棟以上確認された。溝は屋敷地を区画するものと思われ、鎌倉時代の溝とは方位が異なる。出土遺物は少ないが東濃型山茶椀などが存在しており15世紀前半に位置づけられる。鎌倉時代とは地割の方位が大きく異なることから、集落の変遷において大きな画期が存在した可能性を考えることもできる。

江戸時代以降

江戸時代の遺構としては区画溝、井戸、畑、水田跡などが確認された。A区とC区の間には江戸時代に開設された岐阜街道が通っており、井戸の配置からみてこの街道に沿って屋敷が並んでいたと考えられる。この屋敷裏に相当するB区では溝で区画された畑や水田跡が確認された。出土遺物からみて18世紀後半以降の屋敷と思われ、下津片町と下津下町の間に所在する下津新町は18世紀後半頃から形成されたと考えられる。

ま と め

今回の調査の結果、調査区の北西に流れる古河川によって形成された自然堤防の微高地に古墳時代末期からほぼ連綿と集落が展開していたことが判明した。鎌倉街道は調査区の東約500mの位置に現青木川に並行して通っていたと推定され、推定鎌倉街道が乗る自然堤防と本調査区が所在する自然堤防は異なる可能性が高い。本調査区は、古代の集落のあり方などからみて推定鎌倉街道近辺の遺跡とは異なる遺跡と認識した方が理解しやすいといえる。ただし、尾張守護所が下津にあった室町時代では地割の方位が変更されており、かつ調査区が下津城跡推定地から南西に500mの地点であることから、中世「下津」の一角を担う集落であった可能性も考えられる。（鈴木正貴）

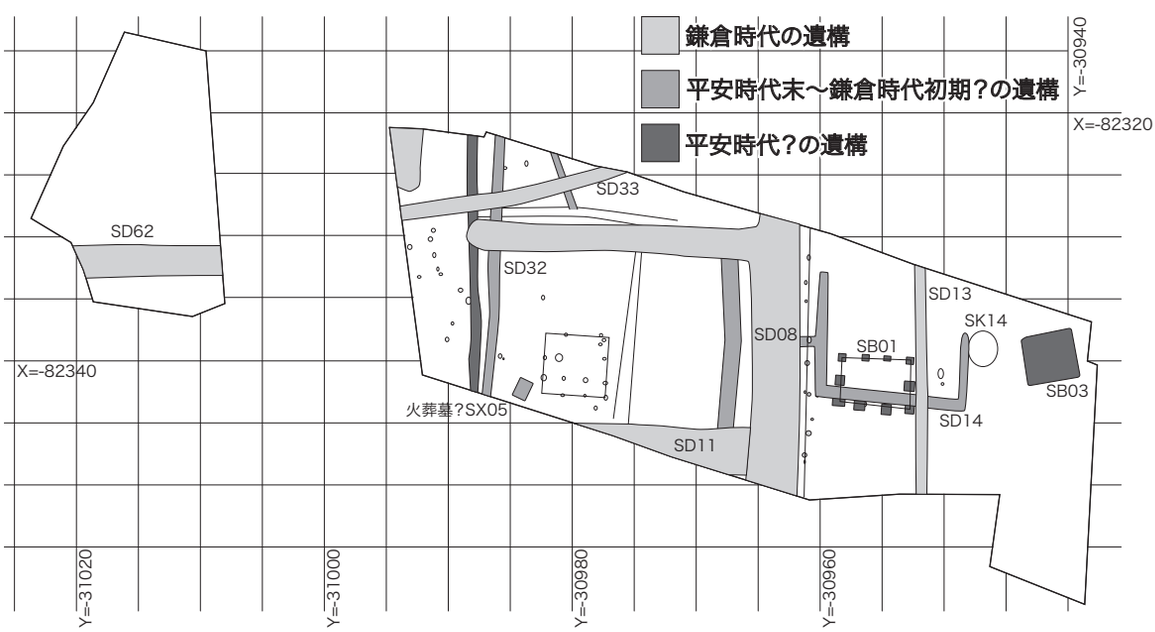


図３　平安時代～鎌倉時代の主要遺構配置図（1:600）

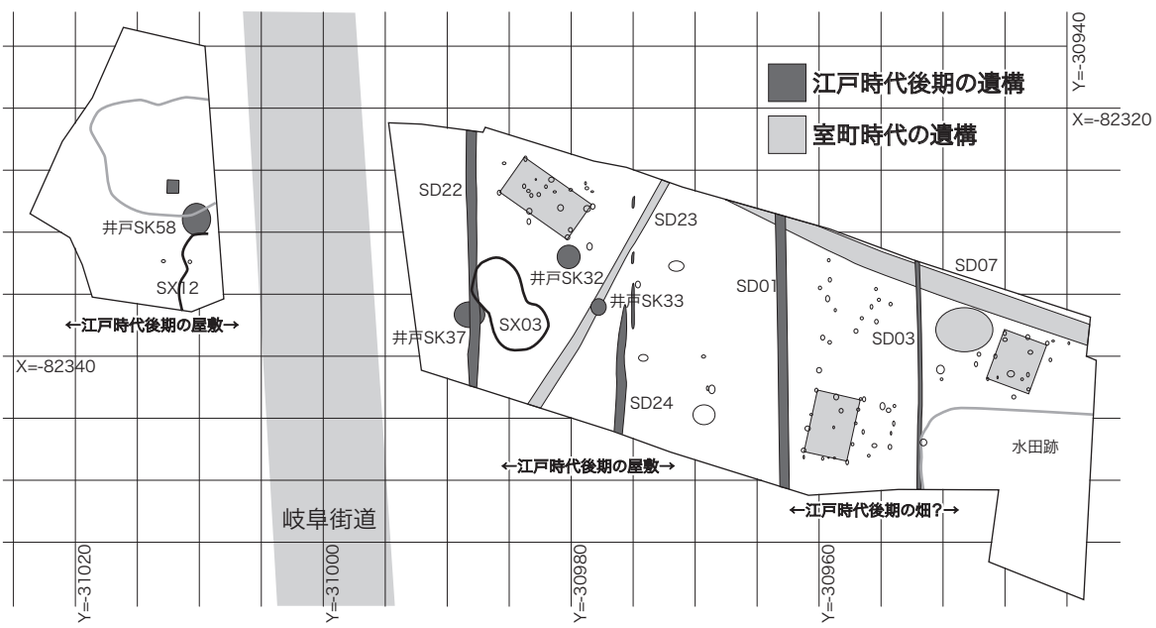
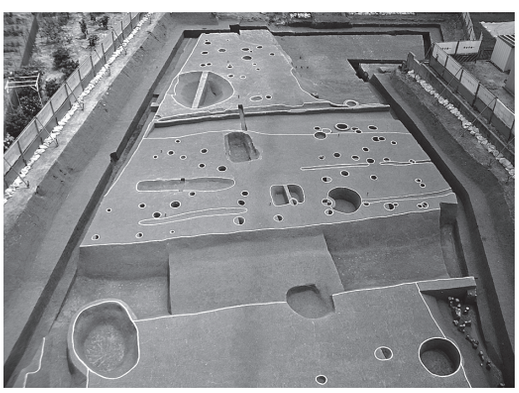
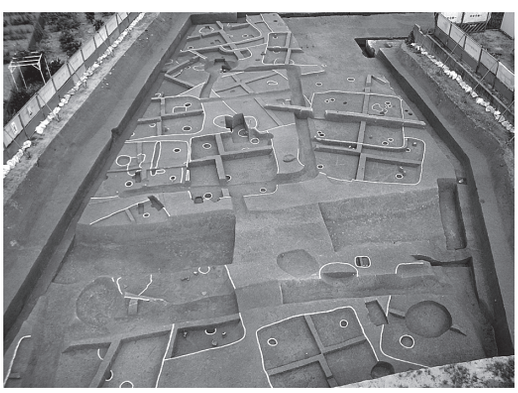


図４　室町時代～江戸時代の主要遺構配置図（1:600）



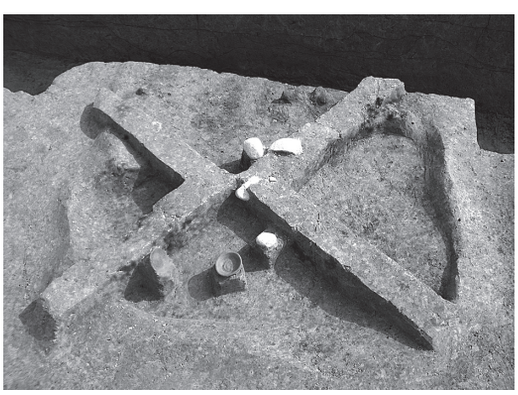
B区１面全体　鎌倉～室町時代の遺構　西から



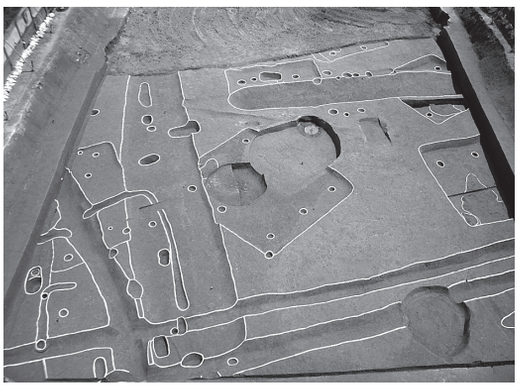
B区３面全体　奈良時代の遺構　西から



Aa区１面全体　鎌倉～江戸時代の遺構　西から



Aa区火葬墓？SX05　北西から



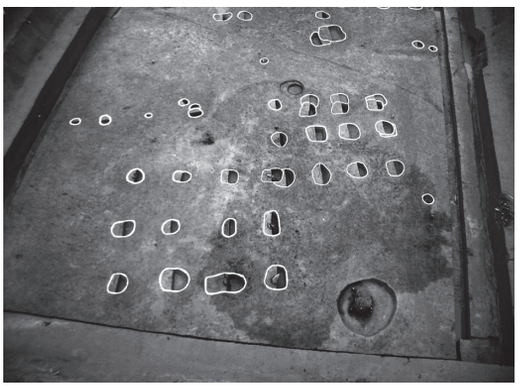
Aa区3面全体　奈良～鎌倉時代の遺構　西から



Aa区掘立柱建物跡SB53検出状況　北東から



Aa区土坑SX07遺物出土状況　南から



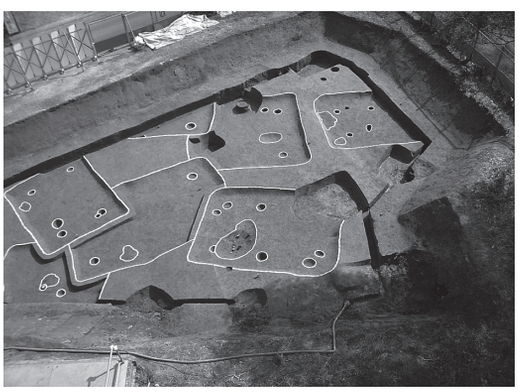
Aa区4面西半部　奈良時代の遺構　西から



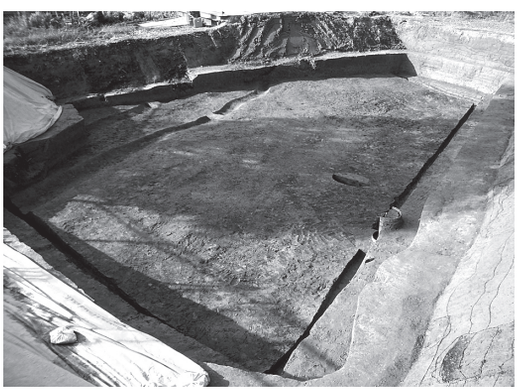
Ab区1面北半部　鎌倉～室町時代の遺構　北から



C区1面全体　室町～江戸時代の遺構　南から



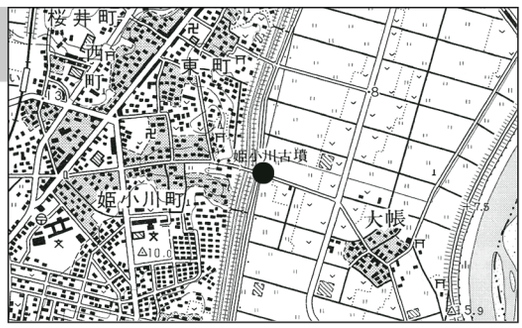
C区2面全体　奈良時代の遺構　西から



C区3面全体　古墳時代？の遺構　南東から

姫下（ひめした）遺跡

所　在　地　安城市姫小川町
（北緯34度54分52秒 東経137度5分49秒）
調 査 理 由　鹿乗川河川改良工事
調 査 期 間　平成17年10月～平成18年3月
調 査 面 積　3470㎡
担　当　者　宮腰健司・鈴木正貴



調査地点（1/2.5万「西尾」）

調査の経過　調査は愛知県建設部河川課による鹿乗川河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成17年10月から平成18年３月にかけて実施された。調査区は東西に横断する道路によって２調査区に区分され、北側を05Ａ区、南側を05Ｂ区と呼称した。

立地と環境　姫下遺跡は、碧海台地縁辺部直下の沖積地に立地する。遺跡の標高は約７ｍで、台地との比高は約４ｍを測る。この遺跡西側の台地縁辺には、獅子塚古墳・姫塚古墳・姫小川古墳・王塚古墳などの古墳が並び、特に全長69ｍの前方後円墳である姫小川古墳は、桜井古墳群中でも最大規模の古墳である。また遺跡の東には内行花文鏡を出土した八ツ塚古墳が、北約700ｍには人面文土器を出土した古墳時代初頭の亀塚遺跡や、南約700ｍには奈良時代の木簡が出土した下懸遺跡が所在する。

調査の概要　今回の調査で確認された遺構は、大きく弥生時代中期、古墳時代前期～中期、古墳時代後期～奈良時代、平安時代、江戸時代に分かれる。また地形的にみると、05Ａ区と05Ｂ区間、05Ｂ区の南側に走る河川によって区切られている。05Ａ区と05Ｂ区間の河川は古墳時代後期以降に形成されたと考えられ、05Ｂ区の南側河川は古墳時代前期以前に形成され、古墳時代中期には大部分が埋没するが、中世までわずかに落ち込みが残存している。

弥生時代　05Ａ区の北西部で２棟の竪穴住居と土坑１基が検出され、弥生時代中期後葉の土器が出土している。

古墳時代前期～中期　05Ａ区から05Ｂ区北側2/3程が居住域で、その南側に北東から南西方向の河川が走る。居住域部分は、古墳時代後期以降の削平を受け、遺構の遺存状況はよくないが、少なくとも十数棟以上の竪穴住居があったと想定される。また05Ａ区では北西―南東方向に走るSD42が、05Ｂ区北西部では、炭化物・焼土を含む土坑群が16基検出されている。河川は大きくNR01とNR02に分かれ、幅の広いNR02埋没後、幅の狭いNR01が形成される。さらにNR01は埋没過程で、断面が逆台形を呈し、北東から南西・南方向を向く形状から、断面がややＶ字形で幅が狭く、東西方向を向く形状に変化する。NR01北岸を中心に、南岸、埋土中より高坏・壺・小型壺・鉢・甕・Ｓ字状口縁甕などの多量の土器や管玉・ガラス小玉が出土し、同じく河川埋土中より鍬・縦杵・横槌・杭や大型加工材を含む木製品も多く出土している。

古墳時代後期～奈良時代　05Ａ区の北部では古墳時代前期～中期の溝SD42に重複するように走る断面Ｕ字形の浅い溝SD43や、やや弧状になるように走る溝群が検出されている。また遺跡全域において、当期に属すると思われる、北西―南東方向の溝が多数検出されている。

平安時代　05Ｂ区南の河川は窪地状に落ち込んでおり、それより北側は居住域となる。居住域では70棟以上の竪穴住居や、当期と考えられる２×２（３）間の掘立柱建物が検出されている。

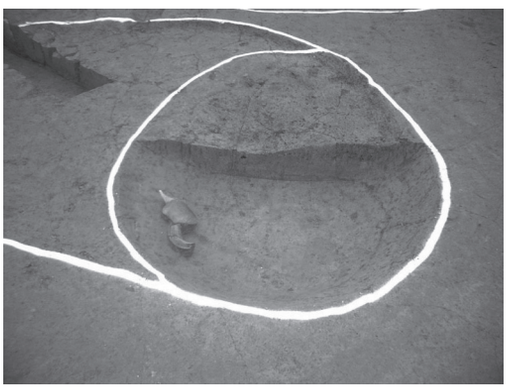
江戸時代　やや北東―南西方向を向く溝群や、05Ａ区南部を中心に連続する土坑群が検出されている。

ま と め　今回の調査では、古墳時代前期～中期と平安時代の遺構群が検出されたことが特筆される。古墳時代前期～中期の遺構群は、多量な土器・木製品の廃棄がみられた河川利用のあり方や、隣接する桜井古墳群との関連が注目される。また平安時代の遺構群は、碧海台地縁辺部に展開する同期の遺跡群の動向を考える上で貴重な事例になると思われる。

（宮腰健司）



05A区 江戸時代土坑群



05A区 弥生時代土坑



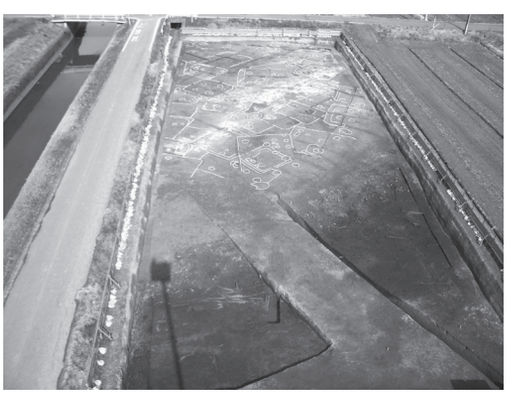
姫小川古墳と05A区古墳時代後期～奈良時代遺構



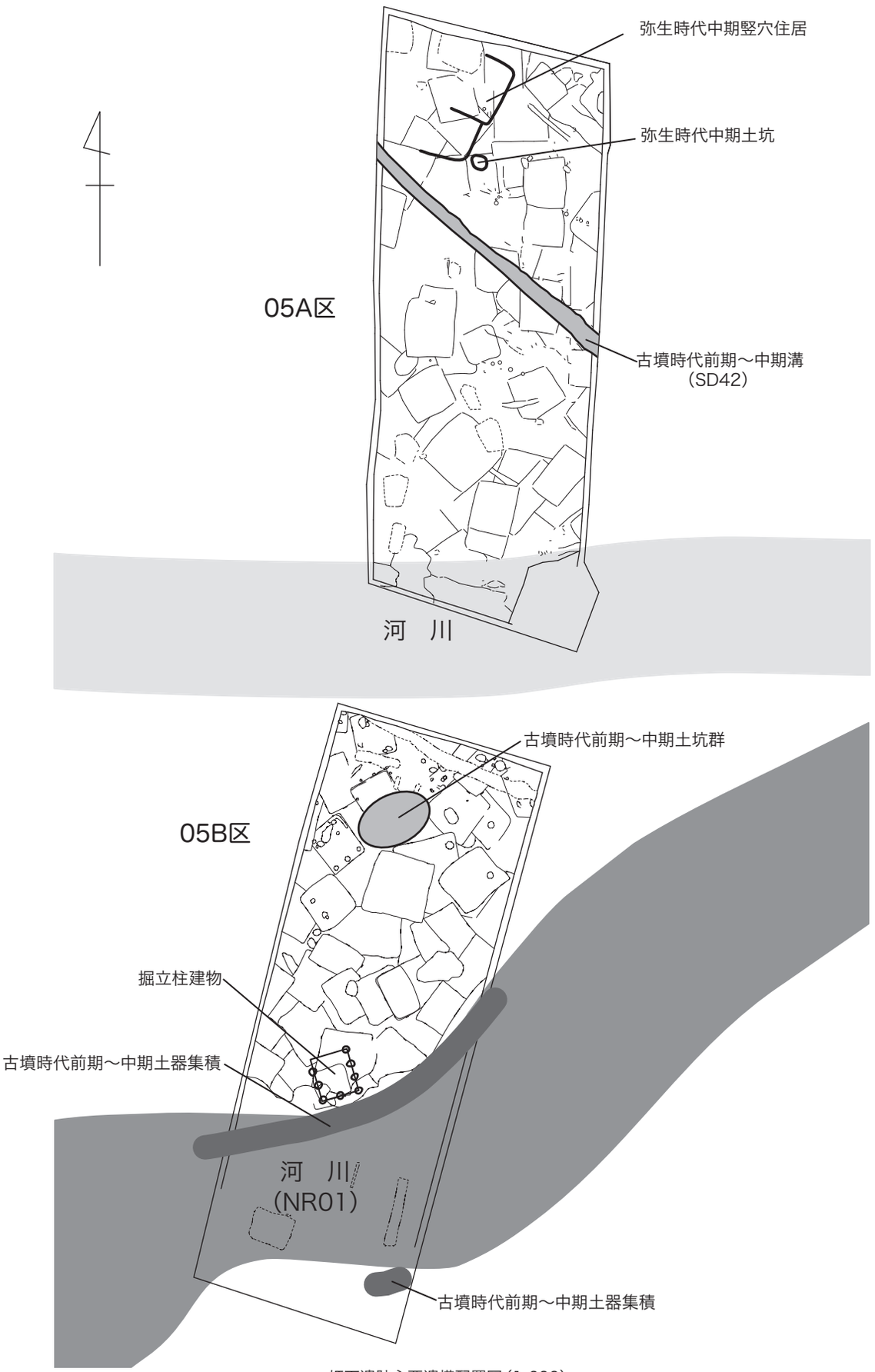
05A区 SD42



05A区 古墳時代・平安時代遺構



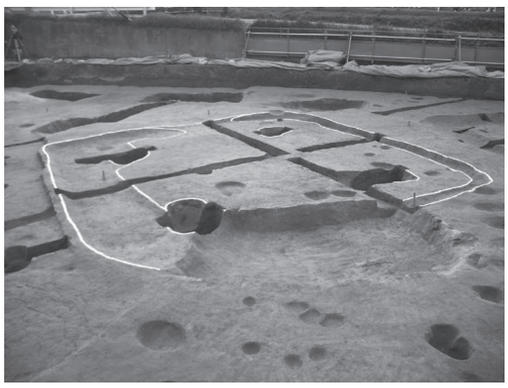
05B区 古墳時代・平安時代遺構



姫下遺跡主要遺構配置図（1:600）



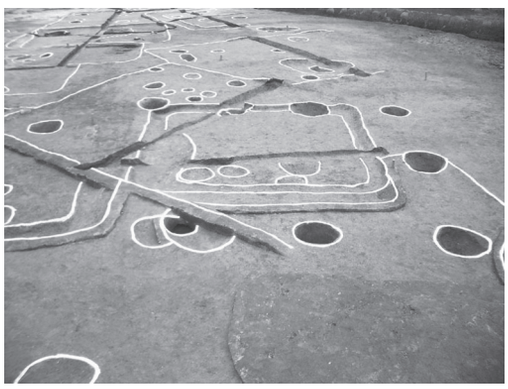
05B区 古墳時代中期竪穴住居



05A区 平安時代竪穴住居



05A区 SD43遺物出土状態



05B区 掘立柱建物



05B区 NR01



05B区 NR01北岸土器出土状態



05B区 NR01北岸土器出土状態



05B区 NR01木器出土状態